

〔翻訳〕

ヘルマン・バウジンガー

揺らぐ《村》観念

(1987)

〔付論〕 ヘルマン・バウジンガー

「村と町——伝統的対比《都市と農村》の現実・由来・社会経済的背景、
そしてイデオロギーの反射作用——」(1978)

Hermann Bausinger

Dorf – das verwackelte Leitbild (1987)

and

*Dorf und Stadt – ein traditioneller Gegensatz. Erscheinungsformen, Herkunft, sozialökonomischer
Hintergrund und Rückwirkungen einer Ideologie* (1978)

河野 眞 (訳・解説)

Japanese translation with a commentary by translator

KOHNO Shin

愛知大学元教授

Ex-Professor at Aichi University

目次

はじめに小話

五つの考察

1. 村は農村？
2. 村をめぐる情感
3. 市町村合併の中で
4. 《村のこれから》と現実
5. 村の貸借対照表

ディスカッション

〔訳注〕

〔付論〕 ヘルマン・バウジンガー「村と町—伝統的対比《都市と農村》の現実・
由来・社会経済的背景、そしてイデオロギーの反射作用」(1978)

〔訳者解説〕

はじめに小話

19世紀から20世紀への転換期のことだが、歳の市には写真屋が出て撮影を引き受けるようになった。町を訪れる人たちも、蜂蜜菓子の代わりに、自分のポートレートを手在家路に就いた。そうした写真屋のもとヘルートヴィヒスブルク〔訳注〕ヴェルテムベルク王国の副都の一つで軍都) 近郊から来た三人の農夫が顔を見せて撮影をたのんだ。《俺たちを一枚撮ってくれ、だけど同じようにじゃないぜ、女房に見せるんだからな》。これを語ってくれた写真屋さんに改めて感謝する次第だが¹⁾、同時に、その話は、筆者にとっては忘れられないものとなった。言葉の意味がいまだに判然としないからである。実際、それはさまざまに解釈ができる。その一つとして、一番当たっていきそうにもないが、間違いなく思いつくものでもあるのは、農夫たちが、写真が瞬間的にリアルな姿をとらえ、そのため却って本当らしくないとの印象をもっていたことである。つまり、その瞬間以外の時間は排除されているからである。しかしたぶん事實は、写真があまり鮮明ではなく姿かたちがぶれることを指しているように思われる。

この小話(アネクドット)で始めたからとて、本稿は、村の写真屋さんの手がふるえたり、現像液が今一つのために鮮明な撮り方ができなかつたなどと言おうとしているわけではない。むしろこのテーマは、変化して止まない複合的な現実から何らかの基本的なすがたかたちを抽出する客観的な難しさを示唆している。《揺らぐ》ことは多かれ少なかれ避けられない。立ち位置はさまざまである。誰かがある特定の立ち位置を決めるや、それに合わせて対象はたちまち、またラディカルに変化する。結果として、すがたかたちは揺れ動く。

とは言え、筆者はこの譬え話にいつまでもこだわろうとは思わない。さっさと本題へ移ろう。本題とは、村という概念の明確な(あるいは明確にはなりようがないかも知れない)含意を問うことである。それは、村のこれから (Dorfentwicklung) というよく耳にする観念をめぐる仮説の検討でもある。

五つの考察

1 村は農村？

筆者の最初のテーゼ、(むしろ用心して) 一番目の懸念 と言うべきかも知れないが、それは、私たちが村について語るときには、誰もが農民的なものを思い浮かべ、しかも古ぼけたイメージをいだっていることである。この点で数年前、*ハンス＝ゲオルク・ヴェーリン

1) これを教えてくれたのはシュヴィーダーディンゲン在住のヴィリー・ミュラー博士 (Dr. Willi MÜLLER, Schwiederdingen) であった。

グは、百科事典の村 (Dorf) の説明が救いようのないものであることに注意を喚起した。たとえば『ブロックハウス』の1968年版の《村》の記述である²⁾。

多かれ少なかれ閉鎖的で地方的な、農民による集団的集住、今日では手仕事職人や工場労働者や通勤者も (みとめられる)。

またその5年後の『マイヤー・エンサイクロペディア』はこうである³⁾。

村：地方の人々の集住形式の一つ、散居集住とは逆に比較的大きく、恒久的に居住がなされる閉鎖性のある集住形式で農耕地域の真ん中に位置する。

現実には村と言っても農民が圧倒的であることはなくなっている。しかし村を農民あるいは農民的なもの結びつけているのは、百科事典にみられるような規定の仕方である。ここでは、農耕地域という強力な術語が、規則づけられた農業的な構造を聯想させる。工場経営を主とするモノカルチャーも*社会的休耕地もこのキーワードにはそぐわない。

このような規定は決して偶然ではない。それは、学問的考察がなまくらな結果ではなく、またポピュリズムの罨でもない。地方的集住 (ländliche Siedlung)、筆者は村 (Dorf) という表現を避けて敢えてこういう言い方をするが、これは、多かれ少なかれ農耕の経済形態が優勢なこと(昔か今かはともかく)によって性格づけられる⁴⁾。もっとも、今日の村がどこまで、どの程度まで農耕という特質からはなれてしまっているかという問いは難しく、最終的な決着はまだである。この点で、歴史を主としつつも今日にまで目配りした村落研究をまとめたのは*ヴォルフガング・カシューバと*カロラ・リップだが⁵⁾、そこで示されたのは、村が生き延びていることであった。また、それは絶えず起きていると言ってもよい。特に危機の時代であればあるほど村は農村的内実へ立ち返り、その延命した構造は強固さを増した。そうした運動は、おそらくおサイクルを終えてはいない。また*ハイナル・ヘンケル (1935-2014) も、村の展開について核心にふれる問いを發した⁶⁾。

2) Hans-Georg WEHLING, *Dorfpolitik. Eine Einführung*. In: DERS. (Hg.), *Dorfpolitik. Fachwissenschaftliche Analysen und didaktische Hilfen*. Opladen 1978, S.7-17, hier S.11.

3) *Meyers Enzyklopädisches Lexikon*. Bd.7. (Mannheim 1973), S.116.

4) クリストーフ・ボルヒェルトの考察を参照, Christoph BORCHERDT, *Ist das Dorf heute noch bäuerlich geprägt?* In: H.-G. WEHLING (Hg.), *Dorfpolitik* (1978 前掲注2), S.21-42, hier S.22.; またその箇所では次の文献の当該箇所が指示されている, Martin BORN, *Geographie der ländlichen Siedlungen*. Bd.1: *Die Genese der Siedlungsformen in Mitteleuropa* (Teubner Studienbücher der Geographie). Stuttgart 1977, S.27f.

5) Wolfgang KASCHUBA, Carola LIPP, *Dörfliches Überleben. Zur Geschichte materieller und sozialer Reproduktion ländlicher Gesellschaft im 19. und 20. Jahrhundert*. Tübingen 1982.

6) Heinar HENCKEL, *Wohin mit dem Dorf? Versuch einer Standortbestimmung*. In: Carl-Hans HAUPTMEYER u.a.,

一つの形式はその使われ方が変化することによって崩壊するほかないのか、あるいは建築物や環境の（前面の価値関心からそれてしまった）第二の作用水準は、すなわち変化した存在の前提の下でもなお今日の利用者に自己を伝達する第二の作用水準は存在し続けるのだろうか。

*ウッツ・イエグレ（1941-2009）もこう論じる⁷⁾。

村の特殊性は……前工業的な地方世界の社会的・コミュニケーション的・文化的な帰結によって規定されている。

イエグレは、《村の内実は農民性にあるのではない》とも断言するが⁸⁾、その地方的前工業性にはなお農民的なものが入り込んでいる。

村を語る人は、今日でも農民について語っているとは言えそうである。が、筆者には、その相関がなお解明されていないように思われる。私たちが村という言葉を口にするときには、あまりに多く、あまりに早々と、伝統的な農民性とのリンクが起きているからだろう。

2 村をめぐる情感

これは、村について語るときには、私たちが知識の面で後ろへ引っ張られていることを意味するだけではない。感覚的にもそこに着地し勝ちなのである。筆者にとって怪訝な二つ目がこれである。つまり、私たちが抱く村のイメージや村との取り組み方は、伝統的な情感的でセンチメンタルな憧れから容易に離れることができない。その点では、村を救おうという呼びかけは、ドイツの森を救おうという呼びかけと似ている。山盛りのエモーション — したがって森に対する姿勢と重なるが、村への思入れはどれほど過剰であっても速度制限も調整剤も、都会人は考慮する必要がない。そこに見られるのは、行動への着手ではなく、感情による染色であり、しかも諦念との折り合いが模様となっている。

たとえば、農村的な生き方が消滅しつつあるリアルな現実と、農村的な雰囲気が活字の世界でもはやされるという組み合わせには驚くほかない。そこで表明されるのは*浄祓された世界へのシンプルな憧れとも言い切れないところがある。農村の暮らしの厳しさや残酷な面もまざまざと描かれる。しかしやはり決定的なのは、あらゆる本質的なものを直

Annäherungen an das Dorf. Geschichte, Veränderung und Zukunft. Hannover 1983, S.6-20, hier S.12.

7) Utz JEGGLE, *Betrachtungen zur Dorfentwicklung.* In: Eckart FRAHM u.a., *Dorfentwicklung. Grundlagen für ein Projekt der wissenschaftlichen Weiterbildung.* DIFF Tübingen 1985, S.35-60, hier S.36.

8) 同上

接的に経験する生き方への憧れなのであろう。田舎の生き方が見たところ直接的であることへのこうした憧れが表出されるのは、決して文藝の分野だけではない。

ここで問いが立てられる。村の再生 (Dorferneuerung) と 村のこれから (Dorfentwicklung 村の展開) へのスケッチもまた都市のパースペクティブと強く結びついているのではないかと。ここでは、一般に広がる情緒の様相をも考慮しなければならない。要するに、商業化と機械化の中の ルソー主義 ([訳注] 自然に帰れ、で言い表される感覚) である。その広がり大きく、*市民的にしてプロレタリアートの羊飼いの劇もそうである。週末に村で演じられるイベントもそうで、薪で焼いたパンと手作りソーセージもついている。この他、経済的な脈絡も想起すべきだろう。永く村落地域は、追加的に必要となった労働者の潜在的供給源にして工業製品のマーケットとなってきたが、それと共に、工業生産の仕組みからはじき出されたり拒まれたりする人々の受け皿の役割をも果たしてきた。かく見るなら、村のこれからは沈痛 (= 癒し) プログラム と言えるかもしれない。村人たちと村々は、都会の人間、とりわけ大都市民がもっているものすべてに手を伸ばさないことが想定されている。《村は村だ! Dorf bleibt Dorf》、村のこれから と取り組む研究は原則表明を要するが、周知のように、これが、その綱領的な看板である⁹⁾。この看板は、諦めでもありアグレッシブでもありポピュラーでもある決まり文句《村は村でしかないけど doof bleibt doof ([訳注] 村人の口調)》をポジティブかつアクティブなものへと応用したものと言ってよい。それゆえ、(たしかに、ネガティブな聯想がアクティブな願望を封じこめる点では、コマーシャルの原則に反してはいるが) したたかな計算である。と共に、アクティブであろうとあがいても、《村は村だ!》が、静的であることは見紛いようがない。

3 市町村改革の中で

しかしもっと重要なことがあり、それが筆者の三つ目のコメントになる。村のこれから に向けたスローガン、またそれによって一般化された観念は、遅すぎるかもしれないことである。ちなみに近年さかんに言われるのは、《全てひっくりめた村のこれから》である。《外側》が是正されるだけでなく、《村の内側の機能、村の住民の労働・生活の諸関係》¹⁰⁾ も重要とされる。これが (これまで長期にわたって一般的であった) 人目を惹く改装やその他の応急の手直しに比べて前進であることは疑えない。社会・経済・エコロジーの諸側面が学術的に事前調査 (たとい常に十分な程度ではなくても) されるのは、たしかにポジ

9) Ludwig HECK, J. Alexander SCHMIDT unter Mitarbeit von Ingrid KRONER und Franz SCHUSTER, *Dorf bleibt Dorf. Leitbild, Entwicklungsprogramm, Gestaltungsempfehlungen*. Hg. von Konrad-Adenauer-Stiftung e.V., Institut für Kommunalwissenschaften. Recklinghausen 1985 (2. Aufl.).

10) *Resolution „Empfehlungen zur ganzheitlichen Dorfentwicklung“* In: Gerhard HENKEL (Hg.), *Dorfbewohner und Dorfentwicklung*. Paderborn 1982, S.4–5, hier S.4.

ティヴである。

しかし《全てひっくるめた村のこれから》は、村を一体的なものとして絶対視するリスクをはらんでいる。現実の村々は、もっと大きな経済的関連や、また政治的にも大きな網目のなかに着地しているからである¹¹⁾。細部でも、それは町村体改革（〔訳注〕具体的には1960、70年代の大規模な市町村合併政策を指す）の例においてただちに明らかになる。昔も今も、改革には多くの原因が挙げられる。改革は、すでに存在するアパシーへの回答であり、偏に改革がアパシーを解き放ったのでもなかった。が、アパシーは、新たな動きが強いる広域的決定構造だけを除け者にしてしまう¹²⁾。しかし村の内側の問題性は町村体改革によって見るからに先鋭化する。行政機構という中心のために、他の諸々の中心機能はすっかり低下し、それと共に村の活力の大半が失われるからである。しかしさらに重要なのは、より大きな相関である。《全てひっくるめた村のこれから》は、本来、より大きな経済的関連とこれまでより広い地域政治の枠組みにおける村の暮らしの構造化ならびに展開と言わなければならない。しかし大方が一致して見ているように、地域プランニングは停止し、集中とモノポールの傾向が強まり、職場は人口密集地帯に偏ることになった¹³⁾。空間計画や地方圏政治（Regionalpolitik 複数の町村体を併せた中規模の地域単位で、数郡〔Kreis〕を併せた地方単位）に負託された生活条件の一般的な価値同等性への留意は実現することができなかった。権力をもつ人々が遠心性への運動を許容しなかったからである。かかる推移の結果として《田舎は空に》なり¹⁴⁾、問題の多い辺地ができ、その状況は（これは追加的に言うのだが）新しいコミュニケーション技術によってもほとんど変わらない¹⁵⁾。他面では、村々の《消失》と言ってもよいところがある。人口密集地帯ではしっかりした形ができていない中で、古い構造が一掃されつつあるからである。

村のこれからをめぐる既存の多数の研究・課題設定・プログラムはたしかに一般的に村を口にすると共に、また一部では三分類をもおこなっている。人口密集地域、ノーマルな田舎地域、人口流出地域である。しかしそこで意外にも目立つのは、それらの具体的な例

11) 前掲注(10)で言われる解決（Resolution）において、どの最初の重点項目がどう説明されているかを見ると、ある種の救いようの無さは言を俟たない。《村の機能的多様性、これがすでに廃棄されたり弱まったりしていることに鑑みて、その保存》。すなわち、何かの《保存》すべしということだが、それはもはや存在しないことが明らかだからである。

12) 参照、Hermann BAUSINGER, *Dorf und Stadt – ein traditioneller Gegensatz*. In: H.-G. WEHLING (Hg.), *Dorfpolitik* (1978前掲注2), S.18–30, hier S.27f.〔訳者補記〕本篇と併せて今回「村と町」のタイトルで翻訳を供した。参照、本誌p. 218–235.

13) 参照、Bernhard SCHÄPFERS, *Die ländliche Welt als Alternative*. In: 参照、DERS. u.a., *Das Ende des alten Dorfes?* Stuttgart etc. 1980, S.11–20.

14) 同上

15) 注目されるのは、ラジオ放送局や電話網プロジェクトの（〔訳者補記〕中規模の地域である）地方圏づくり（Regionalisierung）の志向も、主要には人口密集地域に偏り、インフラが遅れている地方圏はほぼ度外視されていることである。



示や提案は、ほとんどの場合、《ノーマルな》地域を念頭に置いていることである。たしかに、そうした地域で何かを実施するのは意味があり必要でもあろう。しかし、他の2地域にも大きな問題が幾らもあること、またそれらの改革に着手するのはもっと難しいこと、これについて沈黙を続けるべきではないだろう。特に問われるべきことがある。大都市の郊外には既存の幾つかの町村体が合併したために数年で人口が数倍になった新しい町村体がある。そうしたモンスターは、それまた一つや二つではないが、これらをも村のこれからというキーワードで括るのが果たして妥当かどうか、という問いである。

4 《村のこれから》と現実

そこで四番目のコメントである。中間的な地域について、そこでの本質的な問題性は村のこれからで把握できるのかどうかであろう。別の言い方をすれば、村のこれからでは、問題解決の試みを繰り広げるよりも、むしろ狭めていはしないか。これは、村のこれからという言い方を頭から批判しているわけではない。プログラムや必要な施策を挙げるのは正当なことである。しかし村のこれからというこのターミノロジーでは実際には諸問題への目くらし、あるいは捻じ曲げになりはしないか、と問うてみたい。

これを明らかにするために、ささやかで無害な例を挙げよう。シュトゥットガルト大学の「地方集落プランニングのためのインスティテュート」が編んだ『村落案内』には、サブタイトルが謳うように《田舎の特徴をもつ村の改造のための提案と事例》が数多く盛り

こまれている¹⁶⁾。怜悯なパースペクティブと説得的な教育効果をもつ編集である。しかし一か所、ネガティブな印象をあたえるところがあった¹⁷⁾。写真の一つがそれだが、村から放射線状に延びる道路の真ん中には区切りの白線が引かれている。画面の右側は家並で占められている。この写真が少し前のものか現状なのかは不明だが、大きな納屋の扉や金網や板塀や垣根で囲った前庭も見える。その向こうに続くのは二家族家屋の家並である。その一つは店舗になっている。また上階がバルコニーとなっている数軒もある。屋根には公共放送のアンテナが設置され、入り口の空き地には縦の若木が植わっている。一口に言えば、動いているのは住民か、それとも健康のことしか頭になく周りの景色など目に入らないジョギングの人だけといった通りである。したがって、少し余裕があり、単調で、味もそっけもなく、居眠りしそうなほど退屈なたたずまい。この景観に何か変わった話などあるべくもない、と人は思う。— それはそうとして、まとめのような言い方をするならこうなるだろう、これぞ我が村はずれだ、と。しかし実際の写真のキャプションはこうである。

家並の屋根がちょっと変わるだけでも、村の景観は明らかに乱れるだろう。

これを読んで、あらためて写真を見ると、何と、一番手前の家には平屋根があるではないか。が、これを目ざとく見つけた者を責めないでもらいたい。また、これに文句を言う繊細な建築家をも攻撃しないでほしい。つまり、この街路写真のキャプションの場合、屋根の形状がどうであろうと、まったくどうでもよかったのである¹⁸⁾。むしろ逆手にとってこう言うこともできるだろう。この平屋根は、まことに適切で重要なシグナルだ、つまりゾーンの境界を示している、よく御覧、村の端なのだ、と。つまり、中流のやや高級な公務員の住居ゾーンがここから始まるのである（筆者には、これに異論をはさむ用意はない）。

これが問題点として重要なのは、判断の問い方だけでなく、形状の問い方をも決めるからである。村の中心で得られた審美規範を村の全体、したがって延びつつある枝葉にまであてはめるのは、筆者にははなはだ疑わしく思われる。少なくとも、成長しつつも先端が退屈で単調な様相なのは、あらゆる抑止的な尺度を脱した村らしさという意味ではそれま

16) Detlef SIMONS (Hg.), *Dorffibel. Vorschläge und Beispiele zur Gestaltung ländlich geprägter Orte*. Mit Beiträgen von Gerd BECHTLE, Ulrich Leander BRAUN, Rainer BURKHARD, Hansjörg GEISELHART, Hans-Peter MANGIN, Detlev SIMONS, Tassilo SITTMANN, Konrad STÜTZLE. Stuttgart [Institut für Ländliche Siedlungsplanung der Universität Stuttgart] o.J. (1979).

17) 同, S.23.

18) レイアウトの担当者にちょっとした反抗心が起きたのかもしれない。キャプションは、7人の男性がそれぞれ違った帽子をかぶって一つのスケッチを仕上げたようなところがあり、その中の誰かが黒い帽子をつけたということだろうが、だからと言って朴訥な全体像を壊すほどのことでもなかった。

た規範的、と部分的には言えるからである。一般に言われるような審美規範では、村の建築仕様（一回きりのプランニングと解するなら）のたぶん最も決定的なメルクマールは損なわれないだろうが、逆に村らしい内実は犠牲にされる。非シンメトリー、多様な出自の建築資材の活用とコムポジション。そうした非シンメトリーは、美的なプランニングの成果ではなく、つぎはぎ細工と絶え間ない増築と建て壊しと修繕と接合と応用の結果に他ならない¹⁹⁾。新しく建てられる地区で建築様式がゆるんだり、特に兼用空間に近い使い方、つまり矮小農地や商業店舗が入ってくるのは、パラドックスに聞こえようが、抽象的な《村らしさ》の規範よりも、ずっと村らしいのである²⁰⁾。私見では、この点で建築監督局は立派だったとも言える。また村はずれにオリジナルなものを作ろうとする建築家も勇気づけるべきで、かしまった村のイメージで規制するのは適切ではない。たしかにここでは、村の基準は完全には生きてはおらず、逸れてしまっている。と言うより、そもそも村という言葉はもはや当たってはない。むしろ、全体像を無力化すべしとか、大きな脈絡を無視してよいというわけではない。しかし村の中心部からとってきた規範を単純に拡大するのでは不十分なのである²¹⁾。

5 村の貸借対照表

筆者の五番目の（最後の）批判は、今の話題に関係する。また建築に焦点を合せているのではなく、人が生きる社会的・文化的側面の全体に関係する。収支計算をすると、つまり村の暮らしの借方と貸方を照合する場合、残高の益金の項目に挙げられるのは、社会的な諸関係が見渡し可能で近しく狭いことや濃密なコミュニケーションである。しかしこれらは、村ならではの調和へのナイーブな賞賛としてはもはや当たらない。周知のように、近しく狭いのは強度の社会的統制を意味している。しかしそれでも収支計算の結果が太字で記載されるのは、都市から見た計算方式の故と言ってもよいだろう。これまた十分知られていることだが、村で新しく造成された地域などは様相が違っており、貸借が合わない。しかしまったく合わないのではなく、今は未だ合わない。村のこれからという場合、多くの人は、村らしい形式と規範の地平におけるこれからを期待し、それを村の地平へ持ち込

19) 参照, Irma NOSEDA, *Ort ⇌ Heimat. Zur Auseinandersetzung in Architekturtheorie und Volkskunde über Ort, Identität und Heimat*. In: archithese, 3/84, S.3-7, hier S.4.; Ludwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft der Universität Tübingen, Württembergisches Landesmuseum Stuttgart / Volkskundliche Sammlung (Hg.), *Flickwerk. Reparieren und Umnutzen in der Alltagskultur*. Stuttgart 1983.

20) 参照, Ingrid KRONER, *Umweltsoziologie*. In: Ministerium für Ernährung, Landwirtschaft, Umwelt und Forsten – Baden-Württemberg (Hg.): *Dorfentwicklung. Beiträge zur funktionsgerechten Gestaltung der Dörfer*. Stuttgart o.J. (1982), S.59-102, hier insbesondere S.77.

21) 参照, Herbert SCHWEDT, *Abschied von der Dorfidsylle*. In: Martin BLÜMCKE (Hg.), *Abschied von der Dorfidsylle? Ein Lesebuch von Leben und Arbeiten im deutschen Südwesten in den letzten 200 Jahren*. Stuttgart 1982, S.13-20, hier S.20.

むからである。

そうした期待がおかしいことを指摘するには、新しい造成区域を元に考える必要はなく、古くからの村に焦点を合せてもよい。昔のコミュニケーションは生き生きしていたというのは過大評価である。また古くからの村でも、昔はコミュニケーションの場であった施設はなくなっている。酪農場、牛の種付け場、それどころか飲食館ですら消えており、代替の新しいものができてもない。また《生まれつきの》村人でも、特に若者は、村が空っぽで殺風景、そして村の暮らしが退屈であることに不満をもっている。やはりよく知られていることだが、自殺率もドラッグ問題も、町より小さいと言い切れない。村のまとめる力も過大評価されている。実際は、村の若者をそこに結びつけることは、すでにできなくなっている。伝統的な諸々の文化的な機構はそれを果たすには不十分である。まして、村へ新しく入って来た人々をただちに、かつ問題なく統合することはもっと難しい。社会的繋がりや欠如が著しいのは、村の端に新しくできた、経験型研究が《上流島》と呼ぶ地域である²²⁾。そこでは事実として、村との交流への願望はみられない。社会的な距離だけでなく、休暇の期間だけの滞在者であることが多く、自分たちの間だけで交流が成り立っているからでもある。さらに交流への願望が起きる場合でも、実際に関係を築くのは簡単ではない。村人は距離を感じ(またそれを強調もする)、逆に流入した人々の方もまたそれはそれで距離を覚えている。なおこれに関連する一聯の文献では、統合のファクターとしてフェルアイン(〔訳注〕 社団・クラブ・組合/アソシエーション)が特筆される。それは決して間違いではない。しかしそこでは二つのことがらが見落とされている。一つ目として、多くのフェルアインはすでに内部は緊張の場となっている。ちなみに、あまりにも楽観的で和気あいあいとしたフェルアインのイメージは、さしずめ*ローデリヒ・フェルデス(1946-96)の小説『調和の消失』であろう²³⁾。そこでは、ヘッセンの村のできごととして、架橋の見込みのなかった亀裂が男性合唱団によって解決される。二つ目は、フェルアインという活動そのものが流入した人々には古臭くなっていることである。*ディーター・ヤウホのフェルアイン研究が示すように²⁴⁾、流入が多い地域の大きめの村々では、余暇のためにできたフェルアインは二種類に分かれている。一方には伝統的な結集、すなわち古くからの合唱や音楽やスポーツのフェルアインがあり、他方には新しいクラブがある。後者は、たとえばテニス、馬術、チェスなどで、したがって伝統的に村に特有とされてきたタイプとは異なる。なお両者は、多く場合、平穏に両立しているのでもない。古い種類のフェルアインは、も

22) 《上流島》(Oberschichteninseln)の概念については次を参照, I. KRONER, *Umweltsoziologie* (1982前掲注20), S.64f.

23) Roderich FELDES, *Das Verschwinden der Harmonie*. Hamburg 1981.

24) Dieter JAUCH, *Die Wandlung des Vereinslebens in ländlichen Gemeinden Südwestdeutschlands*. In: *Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie*, 28 (1980), S.48-77.

はや村全体を代表しておらず、その存在感は地元の年配の人々の間でも低下しており、さらに特に若者たちにとっては魅力が弱まっている²⁵⁾。

この事実はある種の兆候と言ってよい。問題の解決は、新しいものへの全面転換ではなく、*歌唱団体のやけっぱちのテノール・ヴァージョンがいずれはシルバー・テニスをも支配することはあり得まい。古きものの結集力への信頼でもなく、スマートなIBMエンジニアが夕べのひと時に*《大事な宝はもはやない》と歌で心情を吐露することも考えられない。解決は中間にもとめるしかない。それに、前へ進むには、理論をいくらたくさん語っても、やはり新しいモデルを実行してみなければならない。

少なくともそれへの芽も無いわけではない。特に若者たちに注目するとそうである。若者たちの間では、昔からの村の行き方にはおさまらない共同の活動や成果が形成されたきた。それは、ある種の期待や希望が次の世代に負託される状況のアリバイ作りにとどまらない。

ここで筆者は一先ず止めようと思う。問題をさらに把握して提示するのは非常に難しいことではないが、筆者の関心は、ぱっとしないキッチュを挙げることにはなかったからである。またすべての村が戦場であるわけではなく、風評の厨房が湯気を挙げているのでもない。さらに、《我らが村はもっと美しく》というキャッチフレーズのゼラニウムの花壇に毒針がひそんではいるとも言えない。ただ、フェルアインの役員たちの団体への信仰告白をあまり真に受けるのはいかかがなものか。それはフェルアインの何十周年かの祝辞も同様である。むろん、市長であろうと、州議会議員であろうと、州政府の大臣であろうと同じである。これは、現今を分析することにも、予想やセラピーにも言えることである。

村の諸問題を、親しみのわく光の面に限定したり、ポジティブな価値づけに委ねたりするとすれば、不十分である²⁶⁾。これを言うのは、次のような図式が行なわれているからである。

村の押しつぶすような狭さとは、現実には見渡し可能性、すなわち透明性である。

覗き見、絶え間ない観察、コントロールは本当は接触の密度と生きたコミュニケーションである。

素っ気なさ、刺激の無さは、静寂と安定と解される。

陰鬱な惰性は実際は信頼できる伝統である。

25) 参照, H. SCHWEDT, *Abschied von der Dorfidylle* (1982前掲注21), S.16f.

26) Ludwig HECK, u.a., *Dorf bleib Dorf* (1985前掲注9), S.21f.: 《村のメルクマールの価値転換》の箇所。: またハイナル・ヘンケルによる批判的な見方をも参照, H. HENCKEL, *Wohin mit dem Dorf?* (1983前掲注6), S.8-10.

この種の反転も幾分かは正しい。だからと言って、真実は反対の面にあるのではなく、どっちつかずの中にある。問題のある面が性急にポジティブな光のなかに置かれると、古い村の欠陥を是正するチャンスを失ってしまう。指標は村ではなく、ダッシュ（プライム）記号付きの村である。すなわち、新たな、推移すべき社会的・文化的形状である。

もう一度、レジメをしておこう。ここでは、古き村に即した（実は、リアルに把握された古き村でもそうなのだが）ナイーブな行き方は、満足のゆく土台にはならないこと、物事は一般に考えられているよりも部分的にははるかに複合的あるいは多少は複合的であること、田舎の地域でも今日では非常な見渡し不能に取り組まねばならないこと、これらを示そうとしたのである。さしあたって、*ユルゲン・ハーバーマス（1929-L）の「新たな不透明性」における二文から成る一節を付け加えておきたい²⁷⁾。

事態は客観的には不透明かもしれない。しかし不透明性は、社会を信頼した姿勢で取り組む機能でもある。

本篇は、指針を注意深くモデル化することを差し置いて最終弁論を行おうとしているのではない。もとめられているのは、プランニングと行動を通じてリアルな現実を見渡せるものとする事である。それゆえ、村のこれから（Dorfentwicklung）ではなく村はこれから（Dorfentwicklung）である（〔訳注〕村という枠組みの下での今後ではなく、村の枠組みをも含めた今後を問う意）。

ディスカッション

（〔訳注〕論集の土台となった聯続発表にあたって、企劃者が個々の発表につけたコメント）

ディスカッションの中心にあるのは、私たちの村々の未来を考えるにはどんな村のイメージを指針にすべきか、という問いになるでしょう。この問いをめぐって千差万別の考え方が現れたこと自体、この問題の理論的水準における複合性のインデックス、またプランナーや建築家の人文科学・社会科学研究成果を村のこれからの実際作業へと広げることが非常に難しいことを示すインデックスと言えるでしょう。ちなみに、一つの行き方として、歴史的に形成された村落構造に即した方向性（これを定義することが問題にはなりませんが）を大切にすべきとの考え方があります。そこから見ると、たとえば村の縁辺における郊外型の新築団地などは、建築仕様や用地活用における村に特有の基準を軽視していることとなります。二つ目の行き方は、伝統が全てではあり得ないとして、《新しい村のあり方》を希求することです。後者の場合、たとえば給油所の看板は、科学技術と工業の村へ

27) Jürgen HABERMAS, *Die Neue Unübersichtlichkeit*. Frankfurt/M. 1985, S.143. [邦訳] 上村隆広、城達也、吉田純訳『新たな不透明性』松籟社 1995年

の闖入の標識で、また今日の趨勢に属してはいるが、だからと言って単純に村から締め出すという選択にはなりません。また、そこからモダンに合う村の住宅の外観はどうあるべきかという問題に取り組んだスケッチでは、《村が見下される》のを防ぐために、地域性の強い建築様式の模倣はきっぱり諦める方がよい、とされます。

この方向に行き着くことでは、昔の村になかったものについては《村にふさわしいデザイン》という解決はあり得ないという警告もそうです。つまり、新しい諸要素については、昔の諸要素と区別する方がずっと重要というわけです。そこから、村の拡張や村の新しい地区は新しい建築形態に委ねるべきで、それによって歴史的な村の中心部と新たな拡張地区の二地区を架橋し、また新しい地区の住民には、彼ら自身のアイデンティティを見つける可能性をあたえる方がよいとの見解になります。

また村の歴史的位相に注目するなら、そもそも村づくりのプランニングを想定するのは基本的に錯誤ではないかという疑問も起きますでしょう。これを言うのは、プランニングなどを持ち出せば、現にある《無邪気さ》は消えてしまいかねないからです。言い換えれば、かつての村の作り方に照らせば、決してジェネラルプランに沿ったものだったのではなく、多かれ少なかれ無計画的で偶然的であったことに留意すべきというわけです。逆に、道路計画や平地利用プランなどによって改めて作り直そうとしているのが今日ではないか、ということにもなります。これに対してヘルマン・パウジンガーは、昔は無計画であったことを過大視するのは危険と警告しています。昔も、地域による違いはそれとして、建築の規定や制限があったものの、決定的な違いは、昔は、複雑なプランニングの結果としての着想や切り替えではなく、必要に応じた即座の判断だったことです。そして《これによって、今日では村の典型とされる建築の特徴が成り立った》のです（パウジンガー）。しかしそれを以て、昔の村にはプランがなかったとの結論を導くことはできません。むしろ個人々人（それは建築家のこともあれば施主のこともあります）の創造性が呼び起こされ、それはそれで理知的なプランだったのです。《歴史的な村の基準に則した村の今後に依拠するか》、それとも《新しい建築形態の発展か》というあれかこれかの問いについて、パウジンガーは《これからの村としてある種の型を発展させようとするのは危険なことで、大事なのは、集住地としての村の個性を押さえ、その意味での発展を図ることであろう》と論じています。

最後に投げかけられた一般的な問いがあります。プランニング内容の行政による細分を前にして、またそれと一体の専門主導のプランニングが障碍となる中、統合的プランニングとしての村のこれからは可能であろうか、という問いです。と言うのは、村のこれからへの資金を考えると、専門プランニングの力とその成行きという基本的な趨勢を覆すのは難しいとみられるからです。たとえば、財政を握る道路整備関係の官庁は、すでに多くの村々において、取り返しのつかない傷を残したと言えます。総じて、資金配分を決定するに

あたって統合的な調整が上層に欠けているのです。もっとも、昔の村づくりのプログラムでも、統合的なプランニングの要請によって事が動いたわけではなく、基本的には、個々の希求やその時々勢いのある考え方が力を発揮していたとは言えるでしょう。

訳注

- p. 218 ハンス＝ゲオルク・ヴェーリング (Hans-Georg Wehling 1938-L) ライン地方エッセン (Essen/NRW) に生まれた政治学者。ミュンスター、ハイデルベルク、フライブルク、チュービンゲンの諸大学で、ゲルマニスティック・歴史学・政治学を学び、1971年にチュービンゲン大学でワイン産業関係者と政治の研究 (*Die politische Willensbildung auf dem Gebiet der Weinwirtschaft. Dargestellt am Beispiel der Weingesetzgebung*) によって学位を得た。バーデン＝ヴュルテムベルク州政府の住民の市民意識向上のための機関 (Landeszentrale für politische Bildung Baden-Württemberg = LpB 所在地: シュトゥットガルト) に勤務し、1976-2003年まで広報・出版担当の上級研究員であった。機関誌『国家と市民』 (*Der Bürger im Staat*) を編集し、また叢書『バーデン＝ヴュルテムベルクと政治と国土学』 (*Schriften zur politischen Landeskunde Baden-Württembergs*) を創刊した。バーデン＝ヴュルテムベルク州の歴史と地方政治のエキスパートとして多くの著作と編著がある。フライブルク大学の学生時にカトリック学生組合のメンバーとなるなど教会とのつながりを持ち、地域の宗教事情に関する編著もある。
- p. 219 社会的休耕地 (Sozialbrache) 地理学者ヴォルフガング・ハルトケ (Wolfgang Hartke 1908-97 ミュンヘン工科大学教授) によって1956年に提唱された概念。1950、60年代の農業をめぐる諸条件の変化 (機械化・耕地整理・品種改良・農産物の貿易自由化など) により、そのメリットを活かせない山地や狭小地、生産性の低い農地などにおいて耕作が断念されたことを指す。今日では、環境問題やツーリズムなどの新しい要素が加わったため、使われる頻度は低下している。
- p. 219 ヴォルフガング・カシューバ (Wolfgang Kaschuba 1950-L) 南西ドイツのゲッピンゲン (Göppingen/BW) に生まれた文化・社会研究者。チュービンゲン大学において、はじめ政治学とアングロサクソン文化研究を学び、次いで同大学のヘルマン・バウジンガーに就いて《経験型文化研究》としての民俗学を専攻した。1848-49年革命の民衆行動や19世紀の農村の構造変化をテーマとして学位と教授資格を得た後、現代の多文化の社会を専門とするようになった。チュービンゲン大学教授を経て、1992年にベルリン大学教授となり、同大学の民俗学であるヨーロッパ・エスノロジー研究科を主宰し、2018年に諭退官となった。UNESCOのドイツ委員会のメンバーも務めている。
- p. 219 カローラ・リップ (Carola Lipp 1950-L) 南西ドイツのヘッヒンゲン (Hechingen/Hohenzollern: Zollernalbkreis/BW) に生まれた女性民俗学者。チュービンゲン大学でヘルマン・バウジンガーに就いて《経験型文化研究》としての民俗学を学び、1982年に学位を得た。1989年にゲッティンゲン大学教授となり、1997-2203年間は同大学副学長を務めた。民俗学の知見を活かした歴史研究や女性史研究をレパートリーとする。ヴォルフガング・カシューバとの大部な共著『生き続ける村: 19, 20世紀における村落生活の物質的・社会的再生産の歴史』 (*Dörfliches Überleben. Zur Geschichte materieller und sozialer Reproduktion ländlicher Gesellschaft im 19. und 20. Jahrhundert. [mit Wolfgang Kaschuba] Tübingen 1982*) や、共編著『告発する成人女性と愛国の少女: 三月前期と1848-49年革命』 (*Schimpfende Weiber und patriotische Jungfrauen: Frauen im Vormärz und in der Revolution 1848/49, hg. von Carola Lipp u. Bechtold Comforty 1986*) 等がある。
- p. 219 ハイナル・ヘンケル (Heinar Henckel 1935-2014) 生没年以外には詳らかにし得ないが、本篇が収録された論集に論説「村の美学 — 村の美とは何か」 (*Dörfliche Ästhetik, was ist schön am Dorf?*) が入っている。また落環境保全の関係者として次の著作の主著者の一人であった。 *Plädoyer für ein umweltverträgliches Bauen im ländlichen Raum*, von Martin Blümke (Vorwort), Heinar Henckel (Autor), Detlev Simons (Vorwort), Hans Tiedeken (Vorwort), Hans H. Wöbse (Autor). Bonn [Bund Heimat und Umwelt in Deutschland: BHU. Bundesverband für Natur- und Denkmalschutz Landschafts- und Brauchtumpflege e.V.] 2000.
- p. 220 ウッツ・イエグレ (Utz Jeggle 1941-2009) 南西ドイツのナゴルト (Nagold Kr. Calw/BW) に生まれ、

- テュービンゲンに没した民俗学者。テュービンゲン大学で歴史学とゲルマニスティク、また特にヘルマン・パウジンガーに就いて経験型文化研究（民俗学）を学び、1969年に『ヴェルテムベルク地方のユダヤ人村』（*Judendörfer in Württemberg*）によって学位を得、1977年に『キーピング村—あるふるさとの歴史』（*Kiebingen – eine Heimatgeschichte*）によって教授資格を得た。1981年にテュービンゲン大学教授となり、民俗学を講じたが、病気のため2001年に早期退職した。
- p. 220 浄祓された世界へのシンプルな憧れ（simple Sehnsucht nach einer heilen Welt）たとえば、村には、都会的現象やアトミックで喧噪ばかりの現代文化に汚されない無垢な世界が生きている、といった後戻り志向に彩られた（時にはイデオロギー的な）心理を指す。民俗学には屢々この種の心理が走っている、とパウジンガーは批判した。《浄祓された》（heil）はナチズムにおいて表面化した概念であった。
- p. 221 市民的にしてプロレタリアートの羊飼いの劇（bürgerlich-proletarische Schäferspiele）羊飼いの劇は西洋において永い伝統を持つ牧歌劇で、中世末から宮廷とその周辺において発達し、中世以後期（近代初期）には宗教劇や学校劇として市民化への端緒をつかんだ。それはやがて、主に19世紀の市民文化の展開において改めて地歩を得て一般化し、さらに19世紀から20世紀への転換期には労働者文化の中でも取り上げられた。すなわち労働者文化の形成は市民的文化への同調、あるいは労働者層が市民的文化を我が物とすることに外ならず、それが現代の市民文化でもあるとされる。市民文化の構造に関するパウジンガーの持論が顔を見せたような表現である。
- p. 226 ローデリヒ・フェルデス（Roderich Feldes 1946–96）中部ドイツのオフディルン（今日はガウガー市域 Offdilln/GaugerHE）に生まれ、同地方アイアースハウゼン（Eiershausen/ Lahn-Dill-KreisHE）に没した作家。ギーセン大学とフランクフルト大学（M）でゲルマニスティク、言語学、哲学を学び、道具としての言葉（*Das Wort als Werkzeug*）の研究によって学位を得た。生地に近いエッシェンブルク市域アイベルスハウゼン（Eibelshausen/Eschenburg:Lahn-Dill-KreisHE）で作家生活に入り、1996年に近隣のアイアースハウゼンへ移った。郷土の取材する作家として小説や多くの放送劇、また放送用ドキュメントを手掛ける傍ら、地域の歌唱クラブのメンバーであり、また地域の民俗文物の保存に尽力した。
- p. 226 ディーター・ヤウホ（Dieter Jauch）農村社会学者ウルリッヒ・プランク（Ulrich Planck 1922–L）の弟子あるいは後輩と思われ、1980年代代から2000年代に特に農村社会学の論集に寄稿が見られる。
- p. 227 歌唱団体のやけっぱちのテノール・ヴァージョン 現状が開けないフラストレーションから、正規の歌い方を度外視した新奇な歌唱方法を取り入れる飛躍を指す。
- p. 227 大事な宝はもはやない シュヴァーベン地方の民謡の次の一節の4行目。《Und die Rose und die Nelke / Müsset traurig verwelke. / Verwelke Batenka und Klee: / I han jo koi Schätzele meh'》（薔薇もカーネーションも萎れ、悲しく萎むしかない。サクラソウもクローバーも枯れ、大事な宝はもはやない）。なお Batenka はセイヨウサクラソウ（Schlüsselblume）のシュヴァーベン地方の言い方。エルクとベームの民謡収集にも入っており（参照、*Erk-Böhme, II. S.504.*）歌謡団体の定番である。外資系企業のコンピューター・エンジニアも歌謡団体に入って伝統的な歌をうたうようになる、とは考えにくいとの文脈。
- p. 228 ユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas 1929–L）デュッセルドルフに生まれた社会哲学者。フランクフルト学派のテオドル・W・アドルノやマックス・ホルクハイマーの次の世代の代表者として知られる。

付論：

ヘルマン・バウジンガー

村と町

伝統的対比《都市と農村》の現実・由来・社会経済的背景、
そしてイデオロギーの反射作用

(1978)

目次

- 1 古きトポス：《健全な村》と《墮落した町》
- 2 都市民優越への反対イメージ
- 3 ルソーとドイツにおけるその影響
- 4 都市文化無き国：ドイツ
- 5 市民の内面文化の一部としての村
- 6 農耕関係者の防衛戦術
- 7 現実の民としての田舎の人々
- 8 現実へのイデオロギーの照り返し
- 9 対比図式《都市—田舎》が現代においてもつ意味
- 10 市町村合併後の頭痛
- 11 イデオロギーとリアリズムの間
- 12 ツーリズムの擬似村落

[訳注]

[訳者解説]

1 古きトポス：《健康な村》と《墮落した町》

《村と町》 — これは19世紀半ばにつくられた舞台作品のタイトルである。作者は、シュトゥットガルト宮廷劇場で味のある演技を見せた女優にして劇作家でもあった*シャルロッテ・ビルヒ＝プファイファー(1800-68)である。*ベルトルト・アウエルバッハ(1812-82)の短編小説から幾つかのモチーフを借りて数幕の作品に仕立てた一作で、全体は、古今を問わず観衆受けのするもので組み立てられていた。嫉妬と愛情、情熱と真心、別離と懐郷、そして再会とハッピーエンドである。しかしそのタイトルは偶然ではなかった。村の飲食館の娘《ローレ》が町からやってきた若い畫家に恋をする。繪描きがシュヴァルツヴァルトの村へ来たのは、村の教会堂の祭壇畫のためだった。娘は腰を掛けて、マリア(聖母)の繪のモデルになる。娘の物静かで簡素な姿にうながされて繪筆は進み、それと共に畫家は、宗教的なまでの感動に動かされて田舎娘に夢中になる。そしてめでたく婚約に至る。それ

から数週間後、畫家は、新妻と一緒に都会へ帰る。その間に、彼は都市の繪畫館の館長となっており、教授の称号をももらっていた。しかし都会の住み心地は、教授夫人にはもう一つ収まりが悪い。社交の軋轢や策動、宮廷の因習に圧迫されるばかりである。夫のラインハルトの方も、埒もない雑多なあれこれの博物学に身をすり減らしている。そんな危機の中、ラインハルトは、かつて好きだった（そして今でも好きな）エレガントな伯爵夫人イーダに再会する。レオノーレ（前にはローレという素朴な愛称で呼ばれていたが、今は改まって正規の名前である）はイーダの夫の伯爵に紹介される。が、彼女はやはり田舎の出らしく素朴で率直である。これが演劇の転回点になる、それもポジティブな意味で。伯爵は、藝術家の若い妻のおおらかな性格を気に入って、たいそう誉める。その言葉がラインハルトの目を開かせる。彼は、富貴この上ない伯爵よりも《自分が得たものの方がずっと富貴な自然の財である》ことを感じ取る。そしてローレを連れて都会を離れ、最後は妻と一緒に村へ帰る。

畫家のラインハルトの作ったような言葉遣いや突飛な振る舞いが村人の目にどう映ったかは作品からは分からない。作者にとっては、村へ帰るのは、農村の確かな生き方という輝かしいパラダイスへの帰郷を意味していた。村から町へ、そして再び村へ戻るという往復には、人間の夢想における三拍行動が再現されている。こうした歩みは、合理的（あるいは非合理的な）社会哲学の図式として事例には事欠かない。ナイーヴに経験される（どの視点からでも）《調和のある》世界の中での確かで閉鎖的なあり方、人間はそこから押し出されて、疎隔・喪失・虚偽・危険の空間へ入ってゆく。しかし再び帰るチャンスを得る。ふるさつを見出し、自己と世界との新たな疑念なき一致に至る。演劇作品において、人生のコンパクトな諸段階として反映されているのはこの展開線である。シャルロット・ビルヒ＝プファイファーの演劇作品は大きな図書館のほこりをかぶった棚から取り出さなければならなかったわけではなく、むしろ最近でも「都市と農村の民衆劇集」が編まれ、小さな劇団によって、つまり*演劇組合や*青少年同盟によって上演されるのは、この展開線のゆえである。そこでの登場人物や社会関係が今日の現実に照応していないことは、どんな無邪気な人でも見逃さないだろう。ここで挙げた演劇作品の時代ですら、かなり時代遅れの設定であった。たとい村のイメージの方は、ローレが育った村の飲食館に限定してみても、都市は、一世紀も前から領主貴族とその宮廷だけを指すものではなくなっていた。また作品には市民は現れない。まして、その頃ならすでに形成に向かっていた労働者層も見当たらない。ところがそうした演劇や短編小説が、描写の手法のゆえに《リアリズム》と呼ばれたりする。その根拠は、都市と農村のイメージを今日なお（少なくとも付随的には）決定している光の当て方に存し、それによって現実には視野狭窄さながら剪定されている。

それゆえ、このパースペクティヴについては、もう少し詳しく検討する必要がある。畫

家のラインハルトは、その学業を共にした友人と一緒に村の近くまで来たとき、こんなことを言う。

これがヴァイセンバッハ村だ、遂にここへやって来た。我がエルドラド（黄金郷）、世間という灰色の砂漠のなかの緑のオアシス、平和と幸福の夢のかなめ、……爽やかに香りを放つ谷、清らかな村、その赤い屋根の波、実に素敵じゃないか。新鮮な命の空気を思い切り吸い込もう。まるで我が家だ、……ここでは何もかもが原初通りだ、自然と人間だ

これが村だと言うのだが、本当に村を語ったことになるのだろうか。ここでは村は自然の一片である。今日なら*《社会的緑地》と言われるような構成部分、あくせくした都市民らの心の営みの中である種の役割を果たしている願望である。村は見渡しのきく有機体であり、生きることがそこでは全き自然のなかで完遂される。それゆえ（ドラマのなかでの伯爵の言い方を引くなら）《農民ほどすばらしい生き方はない》となる。それは、村の暮らしの諸々の特質を指しており、要するに質実・健全・開放・率直である。村のこうしたイメージならびに田舎の生き方の反対は墮落した都市で、しかも村に比べると、その現実の仕組みは基本的には視野にほとんど入っていない。都市は、ここでは非自然と人工の領域にある。都市は、見渡しがきかず、人間性が喪失し、人間がばらばらになった領域である。人間にそなわる諸々の特質も、都市では枝葉を伸ばすことなく萎縮している。人間は病み、あるいは偽りに投げ込まれ、混濁と荒蕪のなかにあり、それは都市の全体も同じである。

先の引用の甘い言い方は歯の浮くようなものだが、そうした対比的な価値づけは見紛いようもなくピーダーマイヤー時代（〔訳注〕ナポレオン戦争後から1848年革命までの反動期、いわゆる三月〔革命〕前期と重なり、小市民的な嗜好を特徴とする）の後も続いた。文藝史家*フリードリヒ・ゼングレ（1909-94）は、最近までドイツ文藝において都市が描かれるときの（また都市と結びついた）奇怪さをまとめたことがあった。*イエレミーアス・ゴットヘルフ（1797-1854）は都市を《下水》と評した。*ヴィルヘルム・ラーベ（1831-1910）は《都市という怪物》を語り、*ペーター・ローゼッガー（1843-1918）は大都市を《できもの》に譬え、*ヘルマン・リング（1820-1905）は《熱病》とみなし、*フーゴ・フォン・ホフマンスタール（1874-1929）は諦念をまじえて《都市という大いなる悲哀》を綴った。ラディカルなのは*ゲオルク・トラークル（1887-1914）で、《大都市は狂気》に他ならなかった。また表現主義の詩人たちは、都市を妖怪じみたもの・神秘的なのへと押し上げ、バベル、ソドム、ニネヴェ（〔訳注〕いずれも旧約聖書に描かれる、人間の傲慢と背徳のために神の怒りにふれて滅ぼされた都城）といった比喩が飛び交った。

これらのイメージや比喩からだけでも判明することがある。先ず、それらが現実から得

られたものではないこと、批判に裏付けられた記述からではなく、むしろ無批判な空想に発すること、そして基本的には大都市そのものよりも古くからみられる元素的な思念によることである。正にそれゆえに、そうしたイメージや比喩を克服ないしは中性化するのには難しい。しかし他方で、そうしたイメージに（歴史変化に付随して没歴史的に作用する）神秘的連続性の側面を見るのは誤りである。古典古代（アンティーク）においてもみとめられる都会的世界と田舎の世界の相関を引き合いにするのは、そうした連続性の証左にはならない。今話題にしている地域や文化圏においては、都市は、盛期中世に差しかかる頃に成立した。それ以来、幾世紀もの文藝史に牧歌（イデュレ）が薔薇色の糸さながら通っているのは確かであるが、が、また牧歌は、他の諸々のジャンルの厚い折り目の中に隠れてしまうこともあり、逆に、人の営みと振る舞いの親しみやすい様相が閉じた地平のなかで繰り広げられる基本形式として絶えず現れもする。田舎の生活すなわち農耕を営む人々の敬虔な単調さが宮廷的因習や都市的生活様式に対立するものとして特筆されるのは、牧歌的なパースペクティブと言ってよい。たしかに《田園ポエジー》の諸概念を盛期・末期中世の文藝にまで敷衍する場合、それによって特殊な現象形式を見誤り特定の諸条件をかき消してしまうことを勘案すると、それに異を唱えるのはもっともである。しかし他面では、そうした概念の敷衍が試みられること自体は決して偶然ではない。地方の・村の生き方を対比的に取り上げることは、すでに盛期・末期中世には事実として行なわれていたからである。

2 都市民優越への反対イメージ

しかし牧歌は一つの形式にすぎない。この田舎と農民への親しみのパースペクティブの他にも、様々な表現方法が認められる。たとえば、狡猾であくどい農民も描かれる。とりわけ、突き放した優越感を都市民にあたえるのは、愚かな農民である。田舎人については寡欲だけではなく、貪欲な農民というイメージもあり、後者の野卑や暴飲暴食ぶりは都市民の笑いの種であった。しかしここでも見方は絶えず反転する。宮廷と都市では、農民の洗練されない無作法なあり方に距離を置くのに終始するのではなく、心のこもった飾り気のない様に惹かれもしていた。ドイツ各地の宮廷で催されたパントマイムやパレードでは、農民は重要な役割を果たした。18世紀に至るまで、宮廷ではいわゆる農民の婚礼が演じられた。そこでは領主とその奥方、それに宮廷人士が挙げて農民の装いで現れ、田舎風の音楽が奏でられ、田舎のダンスが催され、時には田舎の献立をたのしんだ。しかしそれは意識的な仮装の次元にとどまっていた。田舎が上で都会が下という格差が面白おかしく演じられても、基本的には都会が上で田舎が下という格差は変わらなかった。都市は己れの価値を自若として保持していた。都市は社会生活と文化生活の中心であり、何世紀も通

じて、その関係を転倒させようとまじめに考える人は誰もいなかった。

3 ルソーとドイツにおけるその影響

転換が起きたのはかなり遅かった。その経緯をここで詳しく取り上げているわけにはゆかず、最小限にとどめたい。少しづつその方向への動きが起きていたとは言え、具体的なスタート地点となると、やはりジャン・ジャック・ルソー (1712-78) の名前を挙げなければならない。ルソーにとって、自然はもはや遊戯的に解された対比ではなく、また閉鎖的な牧歌の空間でもなかった。自然はむしろ端的に、人間が文明化された生き方の混迷から立ち返るべき目標であった。

ルソーの文明批判とそれと一体の自然への憧れがドイツほど大きな反響を呼んだところはなかった。すでにドイツの啓蒙主義には、自然と単純さへの意志が、洗練されたものへの志向よりも強くみとめられた。この点では、啓蒙主義とロマン主義との間に亀裂はなかった。ロマン主義者たちは細やかな感覚と宗教的な心情で自然を切望した。それゆえ、自然のイメージ共々田舎での生き方がセンチメンタルな非現実性に高められたのは当然であった。そうした思念と感覚が広まったのがビーダーマイヤー期である。かくして、田舎はもはや自然の外にありつつ自然に近い空間ではなくなり、自然な（いわば神に嘉された）社会的秩序が保たれている場となった。ちなみに19世紀に差しかかる頃、大工業を営む実業家が、昔の在村貴族の生活スタイルと実際には違わない生き方を望んだ事例があれこれ挙げられてきた。のみならず、爾余の都市民の大多数が見せた性向も、大実業家たちが執心した理想と特に違っていない。さらに、19世紀から20世紀への転換期には、都市の大学生たちのあいだでも熱狂的な《灰色の町の壁を出よう》が沸き起こった。大都市のアスファルトを出て、自然な生き方の森と畑をめざすのである。田舎はそうした生き方がなお自明この上ない場と解されたのである。この脈絡で最後に挙げなければならないのは*《血と土》のスローガンであろう。すなわち、第三帝国 (=ナチス・ドイツ) ではどんな祝賀行事にも*《ドイツの大地》が掲げられ、ナチズム・イデオロギーでは農民の労働と生き方こそ十全な価値をもち健全で本質的、と特筆されたことを想起こしたい。

都市と農村という対比図式のこの最後のけげげしい局面から導き出される問いは、これは特殊ドイツ的な、(もっと慎重に言えば)ドイツにおいてことさら際立ったものとなったイデオロギーかどうか、である。これへの絶対的な肯定は間違いであろう。たとえば*アンリ・ルフェーブル (1901-91) は「フランスの農村で或る日曜日に書かれた覚書」の中で、伝統的なアピールを伴うものとしての農村世界を色彩豊かに印象深く描いている。*そうした言葉は、一見すでに乗り越えられたものが放つ誘惑をつかまえているのかもしれない。しかしヨーロッパの隣国のそうした諸事例は、また相違をも明らかならしめる。ドイ

ツでは、都市と農村の関係をめぐって、(現実を踏まえた) 決算報告が高らかに謳われることはない。(むしろ都市と農村の) 差異と落差は、ドイツで交わされる議論の大部分をも超越して、はるかに自明のこととして立ち現れる。これは、フランスが圧倒的に中央集権であることに照らすと、先ずは意外かもしれない。ヨーロッパの他の多くの国々と同じく、フランスの場合、巨大な首都が国土の他のすべての地域を地方にしてきた。しかしパラドックスに聞こえようが、そうした中央集権の欠如が、ドイツにおける都市と農村の対比構図が特別の意味合いをもつ原因になったように思われる。

4 都市文化無き国：ドイツ

近隣諸国に較べて、ドイツの大都市は、政治的な力がずっと弱かった。フランスでは、唯一の首都パリの中核機能が、それ以外の国土の全域に(首都への下屬を意識し感得する) 田舎の性格を付与した。それに対してドイツでは、大都市と田舎との関係は何十ものやや大きな都市と田舎との関係であり、また同じことがあちこちで起きるために、やや大きな都市と田舎の差異はますます小さくなった。それに大都市と言っても知れたもので、そうした都市の自己主張が、田舎に奪われることもあり得た。たとえばシュトゥットガルトやミュンヘンは、周りの田舎と異なった原理を示してはいない。幸いにと言うべきか、それは多くの角度から指摘することができる。

しかし諸々の大都市のこの特殊な性格は、田舎との関係では、二重の結果をもたらした。特に町百姓が商人や職人と併存していることも多いような都市は、周りの田舎から決定的に違っているわけではなかった。が、正にそれゆえに都市は、村との隔たりをあげつらった。^{*}シルダ市民(愚行市民)の物語は、架空の町シルダに限られるのではなく、実在の多くの都市(特に小さな帝国都市)のこともされるが、要点はそうした都市をアイロニカルに描くこと、したがって自己のアイロニー化にある。しかしそれは、優越への誇りある主張でもある。

他面で、大都市とは言ってもあまり大都市らしくはないことが、却って大都市の怪物めいたイメージが妨げられもせずはびこるのを助長した。そのさい看過し得ないのは、特に19世紀の最後の三半世紀からは、怪物めいたイメージがその暗い色合いを、リアルな現実から調達したことである。すなわち、新たに成立しつつあった**工業都市**の集積や過密ぶりに沿ってイメージは増殖した。そうした場所、つまり溶鉱炉や炭鉱の周辺地域では、怪物めいた都市の巨人的で萎縮を強いるような気配が漂うようになった。喜ばしく健康な田舎の生き方の対極のイメージがなぞられ、呪文さながら呼び出されたのである。

5 市民の内面文化の一部としての村

しかし、都市と農村というパースペクティブを言うなれば認知論的な問題としてのみ扱うのでは不十分だろう。ちなみに認識理論的な指針であると同時に認識障壁であるのはイデオロギーである。すなわちイデオロギーはパースペクティブの確定であり、それゆえある種のフェードアウトが避けられない。しかしまたイデオロギーは、リアルな経済的・政治的な課題とも緊密に連携する。これは都市・農村＝関係のイデオロギー的なパースペクティブにもあてはまる。そうした相関の詳しい論説となれば、社会史と経済史を手立てにして、さまざまな発展の階梯を区分しなければならないだろう。ここでは、時間軸に沿った推移を細部まで明らかにするのではなく、幾つかの局面を考えるにとどめたい。

一番目は、都市と農村という対比の伝統的構図は2世紀にわたって、特に市民性との関係で取り上げられてきたことである。その構図は、ドイツの市民性の政治的状況に根拠をもっている。18世紀末にはじめて明らかなアクセントを得た市民の期待と希望は果たされなかった。市民性の大部分が権力側のリアルな拒絶によって突き返されたことは、屢々描かれた通りである。また突き返されたことによって、内面の特殊な文化が成り立ったことも取り上げられてきた。自然性への高揚、それと結びついた田舎の称揚は、正に内面性の一部であった。ちなみに*ヤーコプ・グリム (1785-1863) はパリから書き送った手紙の中で、この巨大都市に(何と!) 不愉快を感じたことを綴っているが、それは書き手が特異な人格だったことを伝えているだけではない。その時代に起きていた市民性の(一口に言えば)復古的転回の代弁でもあった。その復古性が意味するのは、国民国家の要請ではなく、社会的諸関係と科学技術世界の進展へのロマン主義的な無知に他ならない。

6 農耕関係者の防衛戦術

二番目は、19世紀のかなり永い期間にわたって、ドイツ語圏の諸国・諸邦が**農耕国家**と呼ばれていたのはあながち理由がないわけではなかったことである。およそ百年前には、まだ農民と他の職種はほぼ均衡した割合であった。その後の推移に照らすと不釣り合いに見える農業の比重は、必然的に政治権力の構図に反映された。19世紀の政治権力は決して都市に集中してはいなかった。特に、農業における大地主制の影響は甚大で、またそれはドイツの南部よりも北部において著しかった。しかもドイツ語圏の政治を全体として決定したのは北部であった。田舎の称揚と村の理想化は、一部では防衛戦略であったと解しなければならない。それは、大土地所有者の影響力を確かなものにし、いわゆる農村離脱を少なくとも多少は抑制するのに適っていた。*ディーター・クラマーが明らかにしたように、19世紀から20世紀への転換期の直前には、特に自由流通経済政策の結果として、大地

主でもある貴族層は不本意な退却戦を強いられており、その中で、田舎に力点を置くふるさとイデオロギー (Heimatideologie) は重要な役割を果たした。続く数十年にも、田舎を称揚する特殊な諸条件は絶えず頭をもたげた。その最も顕著なのが第三帝国下で、軍事優先の工業化という一貫した目的は、農業を念頭においた自給自足の志向と共存した。農村ロマン主義はもっともな背景を得て、工業に組み込まれた大衆にとっては提供された代償であり、また農民大衆にとっても、自己を輝かしいものとする可能性であり、また（見掛けではあれ）自己主張の可能性であった。

7 現実の民としての田舎の人々

最後に、三番目として最も重要な側面を挙げよう。清らかな田舎の暮らしをことさら言い立てることによって、工業化とプロレタリアート化を伴いつつ発現した現実の諸問題が覆い隠されたことである。ちなみに*フリードリヒ・エンゲルスは、電信がもつ可能性を歓迎して、予言のような言い方をしていた。電信によって《工業は、あらゆるローカルな制約から基本的に》解放されると言うのである。また《この上ない辺地の水力ですら使える可能性》にも言及した。さらに《最初は都市向けではあっても、最終的には都市・農村の差異を止揚するテコになるだろう》とも述べている。事実として、(最広義における)工業化からは、都市と農村の対立を中和することができたであろう。こういう言い方をするのは、もしその対立図式にあの追加的な機能が加わることがなかったなら、という留保の故である。市民層 (ブルジョワ) は、新しくできた民衆群を、基本的には《フォルク (民)》であるとして受け入れなかった。19世紀半ばの*ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールの文筆、それどころか第一次世界大戦直前の*ヴェルナー・ゾムバルトの発言に徴しても、工業プロレタリアートという大衆をいわば定義不能なオフサイド的存在に追いやり、それに対置して、古き伝統に根差した田舎の農業民こそ本来のフォルク (民) とみなす試みがみとめられる。その志向は、フォルクス Kunde (民俗学) という学問名称にも、また民俗学の最近までの傾向にも反映されている。さらにこの分野では、農民文化を基準にして培われた概念である《フォルクスタンツ (民俗舞踊)》や《フォルクスリート (民謡)》や《フォルクス Kunst (民藝)》などが取り上げられ、それらによって《フォルクスクルトウア (民の文化/民衆文化)》の特色が永く決定されてきた。

8 現実へのイデオロギーの照り返し

しかし、そうした特殊な学問的パースペクティブも、ロマン主義化された都市と農村という対比図式が多くの人々を掴んでいなかったなら、持ちこたえられなかっただろう。対

比図式は分裂症気味の引き裂かれた思考と振る舞いへ進んでいった。人々は、ますます都市的、と言うより大都市的な諸条件に投げ込まれると共に、田舎のイデオロギーはますますファナティックな色合いで塗りこめられた。そしてそれまたリアルな現実には跳ね返らないわけにはゆかなかった。そもそもイデオロギーは、リアルな現実には規定されるだけではない。リアルな諸条件に向けても、正に弁証法的に作用する。具体的に言えば、田舎のイデオロギーはさまざまな現実につながってゆく。都市の暮らしの困難が視野に入らなくなるのもそうであり、また都市生活の困難を何とかするために意味のないこまごました手段が発達するのもそうである。いかにも田舎の営みを感じさせる養豚は、第二次世界大戦後、労働者たちがよく手掛けた副業でもあった。あるいは大都市の郊外の土地を細切れにする*シュレーパー・ガーデンは正に田園的な牧歌(イデュレ)である。これらを嚙うだけで、等閑視するのは、アンフェアであるだけでなく、間違いですらあろう。副次的な営みの場として郊外につくられたミニ集落は、危機を固定することでもあった。ちなみにザクセンの医師モーリッツ・シュレーパー博士は、理念を掲げて、際限なく小さな幸福を広げたのだった。しかし、手段の選び方は一面的であった。田舎イデオロギーが都市独自の解決を妨げた面もあったからである。のみならず、より近代的な都市づくりのコンセプトが今日まで一応念頭においている抵抗の思念もそのイデオロギー・コーナーから発せられていることが少なくない。

それ以上に強調しなければならないことを挙げると、昔も今も、地方イデオロギーが村のためであるかどうかは怪しい。科学技術世界と都市の原理に背を向けるのはそのイデオロギーと結びついているが、その姿勢は村にとってネガティブにはたらいたからである。その赴くところは、多くの場合、自足と凍結、動きの拒否、それに新しいものへの過度な怖れであった。農民の生活が《自然に沿って》おり不変であるのは、常に変化に駆り立てられている都市民には安息をもたらす対極になることができた。これらの物の見方は農民にとっては、もし農民がまじめに受け取ってそれを経済的な思考に組み込んだりすると、著しく害になるだろう。たしかに農民については、不可避にして生得の保守性がよく説かれてきた。事実の面から言えば、農民の保守的姿勢は、(経済学的にも根拠のある)永年にわたる用心深さの結果であった。しかしこの百年間については、そこで起きたのは詰まるところ一種の*自己充足的予言だったのではないか、という問い直しがもとめられよう。時代遅れになった諸形式への固執、たしかに、地方では特に19世紀後半にそれが少なからずみとめられた。また非実用的で非衛生的な民俗衣装、あるいは効果の薄い作付け方法へのこだわり、さらに古い倫理観への傍目には耐え難いほどの執心もありはした。しかしそうした凍結は、決して元々の保守性の表出ではなく、むしろ一面的なイデオロギーへの同調的な回答・同調的なリアクションであった。すなわち、農民存在にたゞたゞ変わらぬ何か、いわば(どんな歴史的影響に対しても扉を閉じているはずとされる)社会的な自

然保護区域をみとめるイデオロギーへの同調である。

9 対比図式《都市 - 田舎》が現代においてもつ意味

都市と農村という伝統的な対比図式は現代においても有効であろうか、またそれはどの程度まで、という問いには概括的な回答すら見出せない。これを止揚するとも見えるのが人口動態に関する統計結果である。先頃おこなわれた町村体改革〔訳注〕1970年代の市町村合併政策を指す)では、住民数は上方に修正されて、行政単位に該当するようになったところが増えた。が、この改革の直前の数値では、住民数2,000人未満の村に住んでいるのは西ドイツ国民の辛うじて四分の一であった。また住民数100,000人を超える都市、したがって大都市に住んでいるのは国民の四分の一強であった。それ以外の50%の西ドイツ国民は、住民数2,000人以上10,000人以下の町村体と、10,000人以上から100,000人までの町村体でほぼ相半ばする。つまり、もはや純然たる村 (Dorf) とは言えない大きさの村 (Dorf)、市場 (Markort)、町 (Zentralort)、小都市 (Kleinstadt)、中都市 (Mittelstadt) で、これらは、大都市 vs 農民存在 (Großstadt kontra Bauerntum) というスローガンには直接的には該当しない空間である。しかし永いあいだその区分、ないしはそれに類したものが行なわれてきた。そうした古いイデオロギーによる対比が明らかになるのは、今挙げた広大な中間ゾーンが中和機能を發揮できなかったこと、むしろイデオロギーがリアルな経験的世界を飛び越えてゆき、したがって経験的世界をくつがえしていたことである。

これに加えて注目すべきは、中規模の町村体においてこの数年ないしは数十年に近代化、またそれと結びついて都市化が相当の勢いで進んだことである。しかしその推移は、相対的に都市の発展に関係づけべきものであろう。たしかに、村々 (ないしはやや大きめの村々) の都市性を過大評価するのは当たっていない。多目的ホール、また屋内プールも含めて、それらができたからとて、古くからの構造がくずれるわけではない。近代性のデモンストレーション的なシンボルであるそうした施設と並んで、近代性の停滞の兆候もけばけばしい現れ方をする。若者たちがオートバイを田舎で乗り回すのもそうで、村の生き方への不満の爆発でもあれば、不満をまぎれさせているとも言える。

伝統的な対比図式がいわばくずれるにあたっては、1945年とその直後の経験も特に重要であった。*クラウス・ベルクマン (1938-2002) は、ナチスの指導を以てしてすら、その大都市敵視の理論を押し通せなかったことを指摘した。大都市と工業地帯への爆撃に直面して、*ヨーゼフ・ゲッベルス (1897-1945) ですら、《我らが大都市市民の不壊の生活リズムと断たれることなき生命意志には深甚の畏敬を覚え》たのだった。戦争の魔力の真ただ中では、魔的で《根無し草の》大都市というイメージはもはや何の意味もなかったのである。

しかしあらゆる謳い文句にも拘わらず、田舎の世界もまた多くの都市市民の経験の中へ浸

透した。数百万人の大都市民が疎開したからである。そこで彼らが経験したのは、健康な田舎の生活という看板とはとうてい相容れないものだった。戦後の買い出し時代も、都市と農村の対比図式を別のリアルな次元へ移し変えた。村の可能性と物資は喉から手が出るほどであったが、それはロマン主義的な光で照らし出されたものなどではなかった。これらの経験、それと同時に都市・農村を対立させる強調ぶりへの醒めた見方も、伝統的図式から信憑性と訴える力を削ぎとった。それ以後、古いカテゴリーがぶり返して議論されるときにも(たとえば極右政党において)、それが的外れでリアリティに欠けるという判断にただちに直面した。

10 市町村合併後の頭痛

しかし興味深いのは最近の動向である。それまた概括的には、一見では、大都市を敵視し村に親しみをおぼえる傾向を示しており、古いイデオロギーと結びついているとの観がある。しかし仔細に見ると、伝統的な先入観に則った動きは皆無ないしは極くわずかであることが判明する。むしろ、醒めた判断とリアルの視点が強い。それは町村体改革すなわち市町村合併をめぐる議論においてうかがうことができる。あるいは現今の状況の特徴を言いあらわすなら、市町村合併後に広まった頭痛ということになるだろう。そこでは、村の政治への懐古めいた持ち上げ方も強い。と言うのは、すでに市町村合併の前から村の政治は事実として必ずしも自明ではなくなっていたからである。もとより、投げかけられた批判には、エイゴイスティックな部分利害が改革基準によって幻滅させられた一派によるものもある。しかしそれだけでなく、自明性の喪失やそれへの危機が、普段は日常些事の陰に隠れていた村の生き方の価値や可能性を改めて明るみに出した面もある。中心は、ローカル・アイデンティティ、密度のあるコミュニケーションへの特殊なチャンス、また*アレクサンダー・ミッチャーリヒ(1908-82)の意味での《身近な世界の防衛》である。屢々(しかし遅ればせに)起きた要求として、村には教会堂が必要だ、学校、庁舎、村議会も必要だ、といった声は、狭隘な反動の表出だけではない、あるいは主要に狭隘な反動の表出だけなのではない。ここでは触れる程度にとどめるしかないが、やはり独自のテーマであろう。またここで取り上げている脈絡から見て重要なのは、このテーマは、都市と農村という伝統的な対比図式のカテゴリーでは分析もできず、実態を記述することもできないことである。

11 イデオロギーとリアリズムの間

それにも拘わらず、この伝統的な対比は単なる過去のものでもなければ、まったく消え

てしまったわけでもない。それは屢々思いがけず論議の中に入り込む。リアルな考察ですら、先入観から身を振りほどくのは難しい。まっとうな論議が怪しげな徒党から喝采を受けたりする。村の政治をめぐる踏み込んだケーススタディ（残念ながらこれはめったに見られないが）だけが、危機に瀕した村の自立性をめぐる争いとして表面化するイデオロギ－的先入観とリアルな論議の絡みあい（時には相互浸透）を解きほぐすことができるだろう。たとえばシュヴァルツヴァルトの小村の両親が子供を越境して隣村の学校へ通わせたくないとしてストライキをする場合、そのロマン主義的な矮小スクール・イデオロギ－（我々はこれでもやってきたのだ！）はどのようにして止むだろうか、村の子供たちが必要とするものをめぐる冷静な取り組みはどこで始まるのか、いわゆるふるさと保存の要請がリアルになるのはどこにおいでであろうか、それらはどこで反動的なグループに篡奪されてしまうのか、《緑の計画》やそれに類した国民経済にちなむ思惑に行動基準はどこまでの射程をもつのだろうか、健全な農民存在という伝統的な鍵盤を抱えて絶え間なく音を立てているロビー集団の上首尾とそれはどこまで重なるのだろうか。

12 ツーリズムの擬似村落

ほとんど常に、非常に多彩な、時には正反対の要素が絡み合い、また多くの場合は向かう方向もさまざまである。そこに、都市と農村という伝統的な対比図式が時として入り込んだかと思うと、他の論議に取って代わられる。今日、都市と農村がインテンシヴに出会い、時にはエクステンシヴに接触することになるのはツーリズム現象であろうが、これは正に好個の見本になる。その一例として筆者も、*フォアアールベルク〔訳注〕オーストリア西端の州でアルプス山脈の一割）において山村が観光村へ変わってゆく経緯を追ったことがある。そしてそこで幾つかの階梯を把握した。階梯と言っても、どこでも同じように進行したわけではないが、特徴としては押さえておいてもよいはずである。その階梯は、差異がたいそう大きいにしても、全体としては、ここで扱われている価値対比が決定的に作用するところがある。

第一階梯：特殊なケースでは20世紀の20年代まで延びていることがあるが、村が身を固くして近代的なあらゆる影響をはねつける。古い諸形式への固執は経済的な衰微を意味するにも拘わらず、変化は視野に入らない。やがて土地は売られ、若者たちは平地へ流出し、村は終焉の手前になる。

第二階梯：外来者によって幾つかの観光企業が設立されると、抵抗も挫折する。そして、ともかくも近代化へ動く。都市のモダンへの思慮抜きの拒否は、一転してこれまた無批判な賞賛に変る。都市からやって来た外来者に遠慮した姿勢で応じるどころか、むしろ歓迎するようになる。

第三階段：ここでブーメラン効果が現れる。外来者は、自分たちの都市的な環境をまったくもめず、とは言え家にいるような快適さへの希求を放棄するのでもなく（これまでとは種類の違ったパースペクティブが入ってくる）、しかも田舎の手つかずの世界すなわち単純・簡素・真実の村へやってくる。

第四階段：今日も、大多数の観光村のたたずまいを決定しているのは、そうした世界の捉え方である。すなわち振り子運動のように、村民の近代性願望と都市民の保守願望といういわば反転が中間の平面で起きるのである。似て非なる村への改修である。たとえば昔の牛舎はしゃれたバーに変わり、支柱を使って丸太小屋ができ、《古着》は新しく仕立てられ、《えらい昔の》歌や踊りが新たに編曲されたり村の夕べで披露されたりする。かく、都市と農村は*永久仮面舞踏会とも言うべき大聯立の一翼をになう。事実、それ無くしては、今日の観光はほとんど考えられない。アルゴイでカウベル（〔訳注〕牛の首につける鈴）を作っている工場も、牛のための製品は20%で、ほぼ80%はツーリスト向けである。

これまた都市と農村のテーマに入って来る。伝統的な対比は今日のそうした諸形式において止揚されると共に、また面白おかしく先鋭化される。私たち一人一人の願望と夢の世界も、既製品にからめとられていることは明らかである。自由な田舎の生活という夢は、土産物という形で保存され、快適な居間のガラス戸棚に並べられる。こうしたリアルな現実には、武張ったイデオロギー批判ではとらえ切れない。伝統的な対比図式とは言え、ここでの表出は、どう見ても遊戯的な性格である。それだけに、この対比図式と永く結びついてきたブロックを崩して、対比図式のリアルな要素を取り出すチャンスとも言える。言い換えれば、大きな課題は《ふるさとづくり》すなわち都会と田舎というヒューマンな生活世界にあることを認識するチャンスである。

しかし他面では、そうした推移はまた、都市と農村という対比図式にこもっている伝統的な先入観が完全には克服されていないことをも意味している。大事なものは、対比図式を正しい次元で据えることである。都市民が田舎を先ずは保養地と解することは不思議ではないだろう。都市民が、田舎の生活と田舎の様式の一部を自分の周りに移植しようとするのも理解できる。都市民の休暇の夢も、先にふれたような分裂症の表れではない。分裂症の兆候が現れるのは、田舎の空気が、空疎な大言壮語の毒気と混じり合うとき、つまり対比がラディカルな形で、すなわちスローガンと反対スローガンが飛び交うとき、たとえば永遠の土とアルファルトの魔窟といった陳腐なイメージが鎌首をもたげるときである。実際、リアルな現実には照らすと、こんな大味なレッテルと反対レッテルがもう一度歴史の表舞台に躍り出る日が来るとは考えにくい。しかし、ここで取り上げたような伝統的な対比がしぶといのも事実で、イデオロギー的な呼号をすでに卒業したと見ることは許されない。

参考文献

- Richard ALEWYN, Karl SÄZLE, *Das große Welttheater. Die Epoche der höfischen Feste in Dokument und Deutung*. Reinbek 1959.
- Norbert ELIAS, *Über den Prozeß der Zivilisation*. 2 Bde. Bern und München 1969.
- Peter METEENLEITER, *Destruktion der Heimatdichtung. Typologische Untersuchungen zu Gotthelf – Auerbach – Ganghofer*. Tübingen 1974.
- Friedrich SENGLER, *Wunschbild Land und Schreckbild Stadt. Zu einem zentralen Thema der neueren deutschen Literatur*. In: *Studium Generale*, 16 (1963), S.619–631.
- Peter ZIMMERMANN, *Der Bauernroman. Antifeudalismus – Konservativismus – Faschismus*. Stuttgart 1975.
- Gerhard SCHWEIZER, *Bauernroman und Faschismus. Zur Ideologiekritik einer literarischen Gattung*. Tübingen 1976.
- Henri LEFEBVRE, *Kritik des Alltagslebens*. 2 Bde. München 1974f. (= ドイツ語訳の書誌データ)
- Dieter KRAMER, *Die politische und ökonomische Funktionalisierung von „Heimat“ im deutschen Imperialismus und Faschismus*. In: *Diskurs*, 1973/74, S.3–22.
- Wolfgang JACOBET, *Bäuerliche Arbeit und Wirtschaft. Ein Beitrag zur Wissenschaftsgeschichte der deutschen Volkskunde*. Berlin 1965.
- Hermann BAUSINGER, *Verbürgerlichung – Folgen eines Interpretaments*. In: Günter WIEGELMANN (Hg.), *Kultureller Wandel im 19. Jahrhundert*. Göttingen 1973, S.24–49.
- Ernst Wolfgang BUCHHOLZ, *Ideologie und latenter sozialer Konflikt*. Stuttgart 1968.
- Klaus BERGMANN, *Agrarromantik und Großstadtfeindschaft*. Meisenheim am Glan 1970.
- Alexander MITSCHERLICH, *Unwirtlichkeit unserer Städte. Anstiftung zum Unfrieden*. Frankfurt a.M. 1969.

訳注

- p. 232 シャルロッテ・ビルヒ＝プファイファー (Charlotte Birch-Pfeiffer 1800–68) シュトゥットガルトに生まれ、ベルリンに没した女優・作家。ミュンヘンで育ち、同地の舞踏家で舞台監督ツッカーニー (Franz Anton Zuccarini 1755–1823) の下で学んで、1813年に「イーザル門劇場」で舞台デヴューを果たした。1824年にデンマーク人の文筆家ビルヒ (Andreas Christian Birch 1795–1968) と結婚した。半世紀にわたってウィーン、ベルリン、チューリヒの大劇場に出演し、特にシラー『マリア・スチュアート』のエリザベス1世役とマリア・スチュアート役、またグリルパルツァー『サッポー』のサッポー役で知られた。1828年からは自ら劇作を手がけた。
- p. 232 ベルトルト・アウエルバッハ (Berthold Auerbach 1812–82) ヴェルテムベルク王国時代にネッカー河畔ホルブ (Horb am Neckar) に生まれ、南仏カンヌに没したユダヤ人の小説家。生家からは祖父と同じくユダヤ教のラビとなることを望まれたが、テュービンゲン、ミュンヘン、ハイデルベルクの諸大学で法学、次いでシェリングに憧れて哲学を学びはじめた。テュービンゲン大学時代に同大学のブルシェンシャフト (学生団体) に入り、ミュンヘンでは過激リベラリストとして逮捕されるなどによって学業をあきらめた。1942年に故郷の風物に取材した27篇の短編から成る「シュヴァルツヴァルト地方の村の話」(*Schwarzwälder Dorfgeschichten*) によって作家としてデヴューした。以後も、独自の作風による多くの農村小説を手掛けた。グスタフ・フライタークとは早くから交友があり、またフリードリヒ・ヘッペルやゴットフリート・ケラーとも交流をもった。
- p. 233 演劇組合 (Vereine) ここでは演劇上演のセミプロやアマチュアの団体を指す。
- p. 233 青少年同盟 (Jugendbünde) 狭義では第一次世界大戦から第二次世界大戦の間に高まった青少年の

- 野外での集団活動とナショナリズムを特質とする運動を指す。またキリスト教会を背景とする種類もある。源流は19世紀半ばであり、広義では今日まで続く青少年の野外・集団活動の諸団体を指す。ワンダーフォーゲル、ボーイスカウト、また「青少年運動」の概念でまとめられる多様な団体を指す。
- p. 234 **社会的緑地** (soziales Grün) 自然を取り入れた公園や道路の緑地帯、また管理された自然保護区などを指す。人手が入らない自然環境ではなく、計画的に配置された自然環境であり、環境保護から見たポジティブな面と、人工的・人為的自然のネガティブな面の両方が指摘される。
- p. 234 **フリードリヒ・ゼングレ** (Friedrich Sengle 1909–94) 印ケーララ州テラッセリ (Thalassery) に生まれ、独バイエルン州アルプス山麓ゼーフェルト (Seefeld BY) に没したゲルマニスト・文藝史家。プロテスタント教会の宣教師の家庭に生まれ、はじめテュービンゲンのプロテスタント教会神学院に学んだが、やがてテュービンゲン、ベルリン、フランクフルト (M) の諸大学でゲルマニスティク、アングリスティク、歴史学を学んだ。特にテュービンゲン大学においてゲルマニストのパウル・クルックホーン (Paul Kluckhohn 1886–1957) に就いて1936年に学位を得、助手となった。1937年にナチスに入党し、1939年から1945年まで兵役に就き、その間、やはりテュービンゲン大学においてドイツ演劇史を論じて教授資格を得た。戦後は1945年にテュービンゲン大学の私講師、1949年に同員外教授、1951年ケルン大学において臨時正教授、1952年マールブルク大学正教授、1959年ハイデルベルク大学正教授、1965年にミュンヘン大学正教授となって1978年に定年退官となった。研究方法では、実証主義とマルクス主義を斥けて、独自の様式史を提示した。ゲーテ時代、ビーダーマイヤー時代 (1815–1848/50)、リアリズム時代 (19世紀後半) の区分を行ない、特にビーダーマイヤー時代の分析に厚い。すなわちそのエポックでは、基本的には《古きヨーロッパ》の再構築である《高い様式》としてのパトスと、片や《低い様式》としてのウィット・諧謔・イロニー・グロテスクが併存し、しかしどちらもリアリズムには至らず、その課題は19世紀後半に持ち越される等の理論を提示した。
- p. 234 **イエレミーアス・ゴットヘルフ** (Jeremias Gotthelf 1797–1854) スイスのエムメン谷ウツツェンドルフ (Utzendorf / Emmental) に生まれ、同谷リュツツェルフリュー (Lützelflüh) に没した牧師・作家。本名はアルベルト・ビツイウス (Albert Bitzium)。牧師の息子として生まれ、ベルンの神学大学で学業を終え、さらにゲッティンゲンでも一年間学んだ。1831年にリュツツェルフリュー教区の副牧師、翌年牧師となった。ペスタロッチの教育理論に沿って教区民の子弟全員の教育に邁進し、また貧困問題などで行政当局とは折り合わなかった。1836年に小説『農民の鑑：イエレミーアス・ゴットヘルフによって綴られた農民の話』(*Der Bauern-Spiegel oder Lebensgeschichte des Jeremias Gotthelf, von ihm selbst beschrieben. Roman* 1837) を発表し、そこで仮託した人物名をペンネームとした。農民世界を扱ったことではドイツ文藝における最高峰とされ、特に村の疫病をリアルに描いた奇譚 (ノヴェレ) 『黒い蜘蛛』(*Die schwarze Spinne*. 1842) は、精神性と宗教性に裏打ちされたリアリズムが高く評価される。1841–49年の『下男ウーリ』(*Uli der Knecht*) と『小作人ウーリ』(*Uli der Pächter. Ein Volksbuch*) の二部作も知られる。
- p. 234 **ヴィルヘルム・ラーベ** (Wilhelm Raabe 1831–1910) ドイツ中部エッシャースハウゼン (Eschershausen NI) に生まれ、ブラウンシュヴァイク (Braunschweig NI) に没した小説家。早く父を亡くし、書店の徒弟となって読書に親しむようになった。1854年にベルリン大学の聴講生となり、1857年に『雀横丁年代記』(*Die Chronik der Sperlingsgasse*) の刊行によって作家として自立の足掛かりを得た。母親の住まいがあったヴォルフエンビュッテルに最も長く住んだが、8年間はシュトゥットガルトで暮らした。作風は詩的リアリズムと呼ばれ、多くの長編小説がある。『詰め物菓子：海と殺人の物語』(*Stopfkuchen. Eine See- und Mordgeschichte*. 1891：タイトルは肥満した主人公のネックネーム) が最高傑作と評価され、初期の教養小説『飢えた牧師』(*Der Hungerpastor*. 1864) 及び一種の社会小説『屍体運搬車』(*Der Schüdderump*. 1870) と併せて代表的な三作とされる。
- p. 234 **ペーター・ローゼッガー** (Peter Rosegger 1843–1918) 墺シュタイアマルク州の小村アルブル (Alpl / Mürzzuschlag ST) に生まれ、同地方の町クリーグラッハ (Krieglach / Mürzzuschlag ST) に没した小説家。本名はロスエッガー (Roßegger)。生家は山住み農民で、貧家のため学業をほとんど受けることができず、また頑健ではなかったため仕立師の徒弟となった。しかし少年時から才能の片鱗を示し、地方新聞の編集者や工場主の援助を得てグラーツ大学で哲学とゲルマニスティクを聴講した。またシュタイアマルク州から3年間の奨学金を得て、ドイツ、スイス、イタリアを見聞した。結婚した1873年頃から文筆家とし

て生計を立てるようになり、1876年には月刊誌『ローゼッガーのふるさとの庭：ドイツの家庭のための雑誌』(*Roseggers Heimgarten, Zeitschrift für das deutsche Haus*)を創刊し、同誌はローゼッガーの没後も刊行が続けられた。創作には、山住み農民の暮らしに取材した藝術作品という一貫した思念がみとめられる。たとえば代表作とされることもある長編小説『最後の人ヤーコブ』(*Jakob der Letzte*. 1887)は、1848年革命後の隷農解放にも拘わらず、押し寄せる工業化時代と、高額な土地買得のために農民は結局土地を手放すことが多かったが、それに抗した農民ヤーコブが、同じ境遇の農民たちに抵抗運動を説いても理解されず、迫害されて故郷を棄て、最後は移民としてアメリカへ渡るという筋をもつ。

- p. 234 ヘルマン・リング (Hermann Lingg 1820–1905) バイエレン・シュヴァーベンのボーデン湖畔リンダウ (Lindau im BodenseeBY) に生まれ、ミュンヘンに没した医師・詩人・劇作家。ミュンヘン大学の他、諸大学で医学を学び、1843年にミュンヘン大学で医学博士となった。バイエルン王国の軍医となったが、所属する部隊が1848年革命に際してバーデン大公国で蜂起した急進派の鎮圧に投入されたことを苦にして神経を病んだ。陸軍病院の勤務も早々に辞して療養生活を送った。その間、バイエルン国王マクシミリアン2世による資金援助を受けていたが、恢復後は主に詩作にいそしんだ。詩人エマーヌエル・ガイベルが1853年に編んでポピュラーとなった詩集に作品が収録されたことによって創作への弾みを得た。ミュンヘンの文化興隆を図った国王マクシミリアン2世の支援をも受けた文人サークル「クロコダイル」(1856–82)では、ガイベルやパウル・ハイゼと共に主要メンバーであった。なおサークルの名称はリングの諧謔詩「シンガポールの鱷」(*Das Krokodil von Singapur*)に因む。多数の詩集があり、また生前に40刷を数えた叙事詩『民族大移動』(*Die Völkerwanderung*. 1866–68)が代表作ともされる。
- p. 234 フーゴ・フォン・ホフマンスタール (Hugo Laurenz August Hofmann von Hofmannsthal 1874–1929) ウィーンに生まれ、ローダウン (Rodaun / Wien 今日ではウィーン市域) に没した詩人・劇作家。富裕なユダヤ人商家の家に生まれ、少年期からニーチェの影響を受け、またシュテファン・ゲオルゲとの交流を得るなどし、ウィーン大学での法学の勉学を放棄して藝術活動に入った。早熟であり、オーストリアの世紀末藝術の代表者となった。オペラの台本も手掛け、ザルツブルク音楽祭を企画したメンバーの一人となった。
- p. 234 ゲオルク・トラークル (Georg Trakl 1887–1914) ザルツブルクに生まれ、ポーランドのクラクフに没したオーストリアの詩人。ハンガリー人の富裕な工業主とチェコ人の母親、また両親ともプロテスタントという家庭に育った。ウィーン大学で薬学を学んで1910年に薬剤師の資格を得た。オスカー・ココシュカ、カール・クラウス、また雑誌『ブレンナー』編集者ルートヴィヒ・フィツカー (Ludwig Ritter Ficker von Feldhaus 1880–1967) と交流をもった。フィツカーによって1913年に刊行された詩集が生前唯一の公刊書となり、またその天才を感知した哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインから匿名の莫大な資金援助を得た。第一次政界大戦に薬剤師として従軍し、ガリツィアに派遣されたが、傷病兵の惨状に接したことが引き金になったともされるピストル自殺を図り、一命をとりとめてクラクフの精神病院に収容されたが、まもなくコカインの過剰摂取により自殺した。表現主義の文藝分野では最高峰とされ、ランボーと並べられることもある。
- p. 236 血と土 (Blut und Boden) ドイツにおける民族主義的イデオロギーのスローガンの一つ。文化的な継承を意味する民族の《血》と、祖国を意味する《土》の2つの要素に焦点を合わせている。民衆と、彼らが住み耕す土地の関係を祝福し、地方の生活を美德として高く評価する。元は社会民主党のアウグスト・ヴィニツヒ (August Winnig 1878–1956) がナショナリズムに傾斜して第一次世界大戦期に提唱し、その後、ヴァイルマル期の末期に農政官僚ヴァルター・ダレ (Richard Walther Oskar Darré 1878–1956) がこの語を大きく取り上げて『北方人種の生命の源としての農民』(*Das Bauerntum als Lebensquell der nordischen Rasse*. 1928. [邦訳] 岡田宗司訳『民族と土 (上)』橘書店1942) と『血と土の新貴族』(*Neuadel aus Blut und Boden*. 1930 [邦訳] 黒田禮二訳『血と土』春陽堂書店1941) を著し、ナチスがこれを採用して国家的イデオロギー的となった。
- p. 236 アンリ・ルフェーブ (Henri Lefebvre 1901–91) 仏ヌーヴェル＝アキテーヌ地方アジェモー (Hagetmau / Nouvelle-Aquitaine) に生まれ、ピレネー山麓ナヴァラン (Navarrenx / Pyrénées-Atlantiques) に没したマルクス主義の社会哲学者。エクサン＝プロヴァンス大学で学び、1929年にフランス共産党員となった。1930年からリゼの哲学教員となったが1940年のドイツ軍のフランス占領のため、ヴィシー政

- 権からも公職を追放された。戦後はラジオ局やフランス国立科学研究センターの研究者となって農村社会学から都市社会学に重心を移した。1950年代に正統派マルクス主義から距離を置き、スターリン批判が重なって1958年に仏共産党を除名された。1962年にストラスブール大学教授、次いでパリ十大学ナンテール校の教授として社会学を教えた。論理学・歴史学・美学などにまたがる多彩な論客であった。『日常生活批判』三部作（1947、1961、1981）は代表作と言える。「フランスの農村で或る日曜日に書かれた覚書」(Ein Sonntag in der Champagne)は『日常生活批判2』『序説』第6節の見出し。
- p. 236 そうした言葉は…… 婉曲な言い方には、ルフェーブルに対するパウジンガーの見方が反映されている。1960年代前半のルフェーブルのその論説では、古代以来の共同体がカトリック教会に組み込まれたという枠組みながらも、儀礼習俗の場としての農村に懐古と共感を覚えるような描き方をしている。他方、マルクス主義に立脚する自由な思想家としてルフェーブルは、1968年の市民・学生の体制批判の動きに資本の論理に組み込まれた日常を打破する契機をみとめるなど批判精神旺盛であった。それらを念頭に置きつつ、村をめぐる伝統的観念についてはルフェーブルが必ずしも洞察力を活かしていない、と民俗学者パウジンガーには見えたことが、こういう表現になったのであろう。
- p. 237 シルダ市民の物語 (Schilbürgergeschichten) シルダは愚かな市民の町(愚都)の代名詞。16世紀以来、市民の愚行が口承文藝の一種《シュヴァンク》の形で語られてきた。どこが由来かについては遊戯的な表現による諸説がある。
- p. 238 ヤーコブ・グリム (Jacob Grimm 1785–1863) ヘッセン地方ハーナウ (Hanau^{HE}) に生まれ、ベルリンに没したゲルマニスト・言語学者。民俗学では『子供と家庭のためのメルヒェン集』(第一巻初版1812)や『ドイツ神話学』(1835)で知られ、また国語学者としては『ドイツ語文法』や、大部な『国語辞典』の基礎を築いた。
- p. 238 ディーター・クラーマー (Dieter Kramer 1940–L) マイン河畔リュッセルスハイム (Rüsselsheim am Main^{HE}) に生まれた民俗学者。マインツ大学とマールブルク大学で学び、1987年にウィーン大学においてヨーロッパ・エスノロジーの分野で教授資格を得た。1965年から1976年までマールブルク大学の「中部ヨーロッパ民俗研究所」の助手、1977年から1990年までフランクフルト・アム・マイン市の「文化と余暇」部門に勤務、1990年から同市の「民族学博物館」の上級学芸員として「ヨーロッパ」部門の運営責任者を務めて2005年に定年となった。またザルツブルク大学とインスブルク大学の客員教授でもあった1995年から1998年には「ゲーテ・インスティテュート (ミュンヘン)」の広報を担当した。2006–07にはドイツ聯邦議会の「ドイツ文化アンケート委員会」の諮問委員を務めた。
- p. 239 フリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels 1820–95) ライン地方 (現在はヴッパータール市域) バルメン (Barmen/Wuppertal^{NRW}) に生まれ、ロンドンに没した社会思想家。マルクスと共に社会主義思想を構築した。
- p. 239 ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール (Wilhelm Heinrich Riehl 1823–1897) ライン河畔で現在はヘッセン州都のヴィースバーデン市域となっているビープリヒ (Wiesbaden-Biebrich) に生まれ、ミュンヘンに没した文筆家・ミュンヘン大学教授。青年期からジャーナリストで達意の文筆家として知られた。革命ではなく社会改良を説き、また保守性が喜ばれてバイエルン国王にミュンヘンに呼ばれ、ややあってミュンヘン大学教授となった。精彩に富んだ多数の民俗記述を残し、また『学問としての民俗学』(Volkskunde als Wissenschaft. 1858) という有名な講演もあって、学問的な民俗学の父とも讃えられ、今日まで高い評価を受けている。とりわけ、グリム兄弟以後のロマン派の民俗学(神話学的潮流と呼ばれる)が上古の名残を追って珍習奇俗を収集し過大な意味付けに走る欠陥が露呈させるに及び、その修正を図ろうとする方向からは、力強い指標として常に名前が挙げられてきた。第二次大戦後に、ナチズムとの同調に至った従来の民俗学の克服が課題になったときにも、先ず起きたのは〈リールに返れ〉という呼びかけであった。しかしまたリールについては、20世紀初頭からナチズムにいたるドイツのナショナリズムの激化のなかで、その流れに沿って好まれてきたという脈絡もみられる。さらにリールの思想そのものも、1848年の三月革命への保守的対応という面が強く、その流麗な文章も必ずしも現実を描写した物ではないという批判が、戦後は起きることになった。
- p. 239 ヴェルナー・ゾムバルト (Werner Sombart 1863–1941) エルムスレーベン (Ermsleben/Faleknstein/Harz) に生まれ、ベルリンに没した経済学者・社会学者。ベルリン大学でグスタフ・フォン・シュモラーやアー

- ドルフ・ヴァーグナーについて経済学・国家学などを学び、ブレスラウ大学、ベルリン商科大学を経て、1917年にベルリン大学教授として経済学を担当した。著者に『近代資本主義』や『これからの資本主義』などがあり、主要著作はほとんど邦訳されている。
- p. 240 シュレーパー・ガーデン (Schrebergarten) 19世紀半ばから盛んになった都市民による郊外の賃貸小園藝地における野菜や花卉の自家栽培で、趣味・教育・自然療法などさまざまな目的と結びついている。この名称はライブツィヒの医師シュレーパー (Moritz Schreber 1808–61) に因むが、これは彼の同僚で同じくライブツィヒで生まれ没したハウシルト (Ernst Innozenz Hauschild 1808–68) が故人をしのんでその墓所において始めた運動が小農園運動の代名詞のようになったことによる。
- p. 240 自己充足的予言 (self-fulfilling prophecy) 社会学者ロバート・K・マートンが提唱した概念。誤った判断や思い込みや風評などが新たな行動を引起し、当初の誤った判断や思い込みを現実化してしまう場合の、当初の判断や思い込みや風評などを指す。銀行が破産間近という誤認や風評のために取り付け騒ぎが起きて実際に銀行が破産する事態などにみられる。ロバート・キング・マートン (Robert King Merton 1910–2003) 米フィラデルフィアに生まれ、ニューヨークに没した社会学者。本来の名前は Meyer Robert Schkolnick、ロシア系ユダヤ人。タルコット・パーソンズと並ぶ機能主義の代表者で、コロムビア大学教授であった。[邦訳] 柳井道夫 (訳) 『大衆説得——マス・コミュニケーションの社会心理学』(桜楓社 1970; 原書 *Mass Persuasion: the Social Psychology of a War Bond Drive*. 1946); 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 (訳) 『社会理論と社会構造』(みすず書房 1961; 原書 *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*. 1949)
- p. 241 クラウス・ベルクマン (Klaus Bergmann 1938–2002) エッセン (Essen/NRW) に生まれ、ギーゼン (Gießen) に没した歴史理論家。ミュンスター大学で哲学と歴史学を学び、1968年に「大都市敵視と農村離脱の研究」(*Studien zu Großstadtfeindschaft und 'Landflucht'- Bekämpfung in Deutschland seit dem Ende des 19. Jahrhunderts.*) によって学位を得た。1972年にギーゼン大学の教授となり、特に歴史教育の方法論を専門とした。
- p. 241 ヨーゼフ・ゲッベルス (Joseph Goebbels 1897–1945) ライン地方の今日はメンヒェングラートバッハの一市域となったライト (Rheydt/ Mönchengladbach/NRW) に生まれ、敗戦を前にベルリンの総統府で自殺したナチスの幹部。宣伝相。
- p. 242 アレクサンダー・ミッチャーリヒ (Alexander Mitscherlich 1908–82) ミュンヒェンに生まれ、フランクフルト (M) に没した精神分析医・著述家。ナチ時代の臨床医学経験を踏まえて現代社会を精神分析の概念を応用して論じ、特に1960年代に影響力をもった。ここで踏まえられているのは、参考文献に挙げられている『都市の没ホスピタリティ』(初版 1965) である。なおこの論者の邦訳では『父親なき社会』(*Auf dem Weg zur vaterlosen Gesellschaft*. 1963. 小宮山実 [訳] 新泉社 1972) がある。
- p. 243 フォアアールベルク (Vorarlberg) において山村が観光村へ変わってゆく経緯 ここで言われる調査研究は次の拙訳に含まれている。参照、ヘルマン・パウジンガー (著) 河野 (訳) 『フォルクスタンデ (ドイツ民俗学) 上古学の克服から文化分析の方法へ』文叢堂 2010, 第3章2節「ツーリズムとフォークロリズム」
- p. 244 永久仮面舞踏会とも言うべき大連立 (große Koalition einer Dauermaskerade) 大連立は西ドイツにおいて1966年12月1日から1969年10月21日まで続いたキリスト教民主同盟 (CDU) とドイツ社会民主党 (SPD) の二大政党の連立内閣を指し、当時の流行語。都市と農村の連立が特殊な位相において一種永遠の関係として思念されるところに現代のツーリズムが成り立っているが、その隆盛ぶりは、諸要素の永遠の関係を縮図化したバロックの宮廷の仮面舞踏会を思わせる、という文意。

[訳者解説]

本篇は、ドイツの民俗学者ヘルマン・バウジンガーの論説、(直訳すると)「村 — 揺らぐ指針像」(1987)及び「村と町」(1978)の全訳である。邦訳のタイトルは僅かに工夫した。書誌データは以下である。

「揺らぐ《村》観念」

Hermann Bausinger, *Dorf – das verwackelte Leitbild*. In: DORFENTWICKLUNG: Aktuelle Probleme und Weiterbildungsbedarf. Referate einer Arbeitstagung des Deutschen Instituts für Fernstudien an der Universität Tübingen (DIFF). Herausgegeben und mit Materialien versehen von Eckart Frahm und Wiklef Hoops. Tübinger Vereinigung für Volkskunde e.V. 1987, S.15–26.

「村と町 — 伝統的対比《都市と農村》の現実・由来・社会経済的背景、そしてイデオロギーの反射作用」

Hermann Bausinger, *Dorf und Stadt – ein traditioneller Gegensatz. Erscheinungsformen, Herkunft, sozialökonomischer Hintergrund und Rückwirkungen einer Ideologie*. In: Hans-Georg Wehling, *Dorfpolitik. Fachwissenschaftliche Analysen und didaktische Hilfen*. Opladen 1978, S.18–30.

論者ヘルマン・バウジンガーは1926年9月17日に生まれ、2021年11月24日に亡くなったドイツの民俗学者で、永くテュービンゲン大学教授を務めた。筆者は、これまで同教授の主要著作数点の翻訳の他、折に触れて小論についても翻訳紹介を試みてきた。今回のもその一つである。なおバウジンガーの略歴や研究成果などは、本誌にも何度も載せているため、ここでは省く。

1. はじめの論説は、エックルト・フラームが中心となって企画された論集『村のこれから：現実問題と今後の課題 — テュービンゲン大学通信教育研究所による討論会の発表記録』の導入ないしは指針として冒頭に置かれた論説である。計画を立てたエックルト・フラームは1941年に生まれ、テュービンゲン大学においてゲルマニスティク、またそれと併せてスポーツ研究ならびにバウジンガーが牽引する《経験型文化研究》すなわち民俗学を学び、特にマスメディアを介した状況下での民謡・民俗音楽の動向をテーマとして取り組んだ。学業を終えてギムナジウムの教員となったが、ややあってフリーのジャーナリストとなった。1981年にテュービンゲン大学の「通信教育のためのドイツ・インスティ

テュート」に職を得、1991年から企劃主任の一人として、マスメディア、村のこれから、文化史、日常と民衆文化をレポーターとした。本編は、フラームが「通信教育」のその機関に在籍してまもない時期のプロジェクトで、パウジンガーの下で学んだ知見を活かしている。実際の議論に関わり、しばらくしてその発表が論文として本書にまとめられた参加者のほとんどは、テュービンゲン大学の通信教育研究所とルートヴィヒ・ウーラント研究所の両機関の関係者である。

企劃のテーマは「村のこれから」である。まだ東西ドイツが分かれていた時期の西ドイツであるが、1960年代末から70年代にかけて市町村改革のスローガンの下に大規模な市町村合併が進行した。交通・通信・住民の日常的な移動行動（通勤・買い物など）などでの手段の発展によって古くからの狭域的な地域区分の維持が不合理性を露呈し、勢い中域的な区分が不可避となったのである。それは大枠では必然性をもっていたが、実際の推進過程では、決定方法や決定内容や変化に伴う公的なケアなどで問題が噴出し、かなり長期にわたって議論が起き、混乱した事態も出来た。それが一段落した時期に組まれたのが「村のこれから」の企劃であった。地方行政の新たな枠組みは出来ても、それを前提にした地域づくりの中身はなお課題であり、その点では時宜にかなったテーマであった。

発表者は20人余に上り、村落史の一齣を材料としてモデル・ケースを呈示する試みや、現実の村落の刷新の様子を追ったものなど、多彩な取り組みが見られる。そのなかでパウジンガーの発表は指針的な性格をもっている。《村》という場合、伝統・因習・安定・安息・閉鎖性などよくも悪しくも静的な印象で考えられ勝ちである。が、実際の村は、歴史的にも現代の実態においても、事実としては常に多かれ少なかれ変動の中にある。同時に他方では、静的な印象に収斂する一般的な心理のよりどころとなったきた面がある。その点では《村》は心理動向のダイナミズムの一角として作用するという機能を果たしてきた。それも含めて《村》は現実の実態と心理とが絡み合う結節点でもある。その近・現代の動向と構造を問うのはパウジンガーの民俗学の構想には不可欠のテーマで、著作においても取り上げられてきた。たとえば主要著作の中でも特に知られる『科学技術世界の中の民俗文化』には「《村》の単一性」の一節が組みこまれている。村はまとまった場所?という問題提起の下での分析である。本篇も、それと重なるテーマ設定で、若い同僚たちが現実の動向を踏まえて議論を交わすにあたっての導入部としてシンボリックな意味をもたせた考察を呈示したのである。なお本篇は長いものではなく、そのため区切りは設けられていないが、理解の便を考えて記者の判断で区切りと小見出しをつけた。

2. なお本篇が論集の導入・指針の役割からシンボリックな性格の論説であるため、付録としてパウジンガーの別の論文を併せてみた。「村と町 — 伝統的対比《都市と農村》の現実・由来・社会経済的背景、そしてイデオロギーの反射作用」で、1978年に地方行政の専

門家ハンス＝ゲオルク・ヴェーリングが編んだ『村の政治』への寄稿で、歴史をも振り返りつつ村とは何であったか、また何であるか、をまとめている。ヴェーリングについては始めの論説の訳注の最初に経歴を挙げた。先の論説より約10年早く、時期的に市町村大合併の最終段階にあたり、世情の話題でもあったため、学術的な論集ではあるものの需要に合わせてペーパーバックの体裁で刊行された。寄稿者としてパウジンガーの学派に属している論者たちが顔を見せているのは、ヴェーリングと親しく、パウジンガーの後輩であるマインツ大学教授ヘルベルト・シュヴェート（1934-2010）が実質的に共同企画者だったからと思われる。なお論集中の一篇であるクリステル・ケーレ＝ヘーツィンガー「村の司祭／牧師と学校教師 — 近代ドイツの地域名士の役割」を本誌の前号（49号）に訳出した。女史はパウジンガーの高弟で、特に地域研究の分野をレパートリーとしている。その寄稿は、近・現代の結集形態であるアソシエーション（ドイツ語ではフェルアイン）が村に浸透するときのメカニズムを歴史に確認する試みと重なっている。

そしてパウジンガーの論説であるが、『村』に関する多岐にわたる考察が手短くまとめられている。本篇では論者自身が細かく小見出しを付けており、諸項目いずれも他の著作や長めの論説で取り上げられていることを加味すると、パウジンガーの知見のダイジェストの観がある。その中には、「都市民優越の反対イメージ」にみられるような村と町の価値づけの逆転と再逆転、さらに「ツーリズムにおける《擬似村落》」で呈示される近・現代の観光の原理も入っている。またそれらの基本になるこの論者の特に重要な考察を挙げるなら、「現実へのイデオロギーの照り返し」の見出しにおいて示される考察がそれに当たるだろう。

改めて注意すべきだが、村と町という対比は、現実の特徴を取り上げて成り立っているが、同時に、すぐれて観念の次元にある。それは、たとえば、今日のように工業国では農業就業者の全経済活動人口に占める割合が3%やそれ以下になっても、町と村という対比が思考の型として頭から消えないことを顧みても分かる。その点では町と村の対比はいわば原理的な性格にあるが、その近・現代のメカニズムの解明においてパウジンガーは独自の視点を以て臨んだ。それは、パウジンガーによる民俗学の再構築において欠かせない理論にもなっている。

なお親近な着想として、（パウジンガー自身がよく言及するところだが）テーオドル・W・アドルノの社会哲学にも注目しておきたい。もっとも、アドルノの考察は（時代状況と表現様式が絡んでいるが）問題点を論理的に突きつめる余り、自己の立脚点を掘り崩してしまっている、とは、これまたよく評されることである。ちなみに、パウジンガーは大学生の頃にアドルノの社会哲学の大波を受けた世代で、アドルノの思索を練り直して民俗学の再考に活かすことになった。ここで言えば、社会に支配的な観念の風圧にさらされ、遂にそれを受け入れることによって自己を見失いながらそこに安堵するという姿勢の推移

を、アドルノは大衆心理の特質として抉り出していた。またそれは、ファシズムの解明の意図とも重なっていた。パウジンガーは、そこにヒントを得て、都市民によって実態とは懸け離れていわば後光を付与され農民が、流布されたその観念を受け容れて自己を光輝ある存在と見るようになる一般的な心理現象へと検討を進めた。その赴くところ、農民の悲惨な境遇から自他ともに目をそらすという副次的効果から、(さらに重要なことだが) 社会構成に関する一般通念の定着まで、広範な作用がみとめられることを論じる。

言うまでもないが、社会が何であるかは、事実としてどうであるかに加えて、どんな思念がそこにからんでいるかを併せた複合である。パウジンガーの民俗学はそれを組み込んで再考された。なおここでは、それを説明するために、近似した構図を説いたアメリカの社会学者ロバート・K・マーソンの自己充足的予言が引き合いにされる。マーソンのそれは、大衆社会論およびメディア論の性格にあり、個々の現象を説明する手立てであるが、パウジンガーは、同じような構図を長大な時代思潮として措定した。それは必然的に、精神史の流れが検討課題になることを意味した。そこに注目すると、町と村に関する手短かな解説は、パウジンガーの民俗学の全体、また個別領域では口承文藝に関する基本理論とも重なることが見えてくる(次の拙訳を参照、パウジンガー『口承文藝の理論』あるむ 2021)。むしろ、ここで紹介する2篇は町と村のテーマに即して受けとめればよいが、具体的な話題であるだけにパウジンガーの民俗学への案内としても読むことができるだろう。

なお今回の二篇については、いずれも当該論集の版元である研究所と出版社から好意的な配慮を得ることができた。

Nov. 2022 S.K.